

他と張合うて、其の獲物を争うたことは無い。彼には殆んど競争者が無く、彼も亦た競争者を認めなかつた。即ち總ての獲物は、彼自から求めずして、向ふから彼を求めて來つた。

彼は未だ牛津大學を出でざる以前に、首相の器として、推許せられた。而して議院に入るや、其の第一期の終りには、其の同僚は概ね彼を以て他日の宰相と認識した。

虞翁は一切官職の履歴なき彼を、一躍内務大臣に拔擢した。キヤメル・バンナマンは、其の首相位と自由黨總裁の相續を、彼に託した。而して人皆之を相當の事として、誰しも異存を唱ふる者はなかつた。凡そ人生の行路に於て、未だ彼が如き順境を經來りたるものは、何れの社會にも珍らしく、別けて政界に於

ては、全く無比と云はねばならぬ。

彼の弱點は此の順境に成立したに原づく。彼は陰謀を施さざるのみならず、施す可き必要には、曾て遭會したることが無かつた。従て他の陰謀に對して、自から防禦する術を解せなかつた。否な彼自から防禦せんとは思ひ得なかつた。此れが彼の一九一六年十二月失脚の已むなきに至つた所以だ。

如何なる難題も、一たび彼の手を觸れば春を生ずる趣があつた。されば彼は、人事の葛藤に、少しも氣を腐らすが如きことは無かつた。彼は巧妙なる外科醫が其の切解を須るす、癰疽の自から熟し潰ゆるを俟つて、徐ろに其の膿血を掬し去るが如く、力を勞せずして、物自から物を解決せしむるの道を會得した。但だ餘りに此の方面の味を覺え過ぎて、往々重大問題を輕視し、樂天視したる傾向があ



つた。此れが彼の失脚の一因となつたであらう。

彼は如何なる場合でも、局外から観るだけの距離を保つてゐた。乃ち彼自身に就てさへも、其通りであつた。従て本書の中にて、彼は自己の功名談、苦心談には、一切觸れてゐない。世間では針小棒大と云ふが、彼は之に反して棒大針小だ。彼の親友は彼を評して、アスキスは、謙讓てふ美德の境域を超越して、寧ろ罪過と云ふべき程に、自己を抹殺してゐると。

### 十四 最初の批判

凡そ世の中に、彼程首領として公平なるは無く、彼程同僚として忠實なるは無かつた。彼の缺點は、何れかと云へば、餘りに公平に過ぎ、而して恐らくは、餘りに忠實に過ぎたことだ。

世界大戦に際して、キツチナー將軍は、陸軍大臣となつた。埃及とか、印度とか、植民地稼ぎの軍人にして、政黨屋の内幕などには、夢にも觸れたことが無かつた。従つて其の内閣に入るや、宛も蟹が猿の社會に飛び込んだる趣があつた。その當惑知る可きのみだ。然も將軍は只だ首相アスキスに信頼した。而してアスキスも亦た將軍に信頼した。而して互に相得た。

アスキスは自ら雅量や、義侠を以て、世に廣告しなかつた。然も同僚の過失や、難題や、面倒は、宛も當然の事として、之を己に引き受けた。而して其の功績に至りては、是亦た當然の事として、悉く皆な其の關係者に、分配し去つた。



されば一度彼の同僚となりたるもの、一度職を彼の内閣に奉じたるもの、一度彼と事を共にしたるものは、何れも彼に傾倒し、彼に感謝しないものは無かつた。

但だ彼は民衆的大政治家では無かつた。彼は雄辯と云はんよりも、明辯であつた。而して彼の演説は、議會に於て、一の模型を作した。簡潔、明淨、透徹、典雅、理正しく、言醇に、義達し、意通じた。然も千萬の群衆を、躍動鼓舞するが如き熱火を缺いた。史家グーチ氏は、此書を評して、

牛津伯は、最大經世家を作る所の想像力と、創造的接觸とを缺いてゐる。然も彼は能く我が大英國の、秩序的自由の理想に闕く可からざる、多數の法案を通過せしめた。従つて彼の史上に於ける位地は安全である。

と。又た曰く、  
若し此書が、モーレー卿の回顧録や、グレー卿の「二十五年」と比す可き大著

作でなしとするも、何にもせよ、偉大なる紳士の著作に相違あるまい。

と。又た曰く、  
多くの政治家の自傳は、吾人をして著者の才能に於て、評値を高め、品性に就て、評値を卑くす。されど此書は、著者の能力に就て、評値を高めざるも、最も無私にして、最も宏量なる一人として、吾人の尊敬を崇むるものである。と。以上は如何にも適評と思ふ。記者は唯だ彼の晩節の蕭條たるを見て、深惜に禁へない。

(昭和二年二月)

### 現代に稀なる典型の政治家

#### 牛津伯アスキスの死

現代に稀なる典型の政治家



牛津 伯アスキスの死は、現在の英國政界には、何等直接の影響はあるまい。彼は近年殆ど政界に於ては豫備役となり、而して病の爲めに、世間に顔を出す機会さへ多くなかつた。されどヴィクトリア朝との連絡は、此が爲めに幾んど断絶せられた。彼は恐らくは現代まで持ち傳へられたる、最後のヴィクトリア朝政治家の典型であつた。固より他の一半は、新時代に屬したれども。

天は彼に不公平なる程、多大の賦能を與へた。彼は單に名宰相であつたのみならず、若し彼が宗教界に入らば、名大監督たる可く、若し彼が實業界に入らば、大銀行の頭取、大會社の社長たる可く、若し學界に入らば、大學の名總長たる可く。乃ち彼が名大法官たる可き機會は、彼自から辭退したるが爲めに、之を逸し去つた。彼は如何なる場合でも、第二流に下る能はざる程の、或物を持つて生れた。而して彼は毫も之を濫用せず、能く之を長養し、且つ能く之を調節した。

彼は其口に金匙を啣んで生れ出でたる貴族ではなかつたが、其の幸運の星は、學生時代から首相たるまで、其の頭上に輝いた。但だ晩年世界大戰以來、其の運星は未だ全く墜ちざるも、過半其光を失うた。「待て而して見よ」(wait and see)の短句は、彼が敵人の彼を攻撃する最鋭、最毒の利器となり、而して彼は此れが爲めに煩はされて、遂ひに再び振はなかつた。

若し彼に不足ありとせば、其は蠻力であつた。押し強く突き込む力であつた。鐵面皮であつた。人氣取りの技巧であつた。大向ふを伸らす芝居掛りの仕打であつた。人心を收攬する熱情であつた。當機即妙の知術であつた。約して云へば、彼には其の同僚であり、部下であり、後に彼に取りて代りたるロイド・ジョージが、多量に持ち合せたる或る物を缺乏した。

現代に稀なる典型の政治家



されど、過を見て仁を知る。吾人は彼の長所よりも、寧ろ短所に敬服する。彼の  
 本領は其の缺乏したる點に於て、發揮せられた。彼の缺乏したる或る部分は、固  
 より能はなかつた。然も他の或る部分は、能はなかつたと云ふよりも、寧ろ爲す  
 を屑しとしなかつた。即ち人爲さざる所ありて、始て爲す可きもの、彼に於て  
 之を見る。

彼は偏理者でもなく、空想家でもない。彼は寧ろ臨機應變黨に近かつた。されど  
 概して彼は主義主張に忠實であつた。彼は同僚として忠信であり、首領若しくは  
 長官として寛大で、且つ地味なる義侠であつた。彼は個人としては清廉であり、  
 且つ能く公私を區別した。

彼は政權は天下の公器であり、政治は天下の公務であり、政治家は天下の公人で  
 あることを能く知り、能く辨じ、能く行つた。彼亦た人の子だ。愛憎の念、恩讎  
 の情、中に動かぬこともあるまい。されど彼は之を外に暴露せしめざる程の、自  
 制力と、矜持心との持主であつた。

(昭和三年二月十七日)

### ブース第二世の近著

#### 一 ブース一世夫婦

予は救世軍人ではない、但だ其の同情者である。救世軍には予の趣味と理性と  
 に一致し難き點が少くない。されど其の救世済民の熱腸と、其の直前勇進の實行的  
 態度とには、恐らく何人も同情を禁じ難いであらう。少くとも救世軍の救世事業

ブース第二世の近著



は、口舌のみでなく、實行的である。然らざる迄も實行的たらんと心掛けてゐる。

頃ろ帝國に來朝したる第二世ブリス大將より、其の近著『反響と記憶』に手摺して贈り來つた。予は直ちに之を一讀した。而して救世軍の今日の盛大を致す所以に就て、聊か得る所あるを覺えた。

如何なる事業にても、一代にて成就するは、決して容易でない。信長と云ひ、秀吉と云ひ、何れも一代限りであつたが、家康に至りては、其子、其孫に至りて、其業愈よ恢弘せられ、其の基礎愈よ堅固となつた。我が救世軍創業者ブリス大將は、世にも稀れなる仕合者であつた。第一は其の『より善き半身』カザリンを得た。第二は其の相續者に、長子プランエルを得た。カザリンは、尋常一様の良妻賢母ではなかつた。彼は其夫と與に、救世軍の創業者たる榮冠を分つに、不足な

き資格ある女傑だ。

凡そ世の中に、夫婦と云ふ夫婦の中にて、彼等兩人の如く、其の長短相補ひ、緩急相扶け、身心兩ながら相ひ合體して、其の最善の理想に向て、奮闘したる者はあるまい。

本書の著者第二世ブリス大將は、決して盲目的に、其の父母を崇拜しない。彼は父の短所をも知り、母の缺點をも知り抜いてゐる。而してそれにも拘らず、彼等兩人の殊なりたる性格と教養とが、茲に一對の好夫婦を見出し。其の合作として、救世軍の一大制度が、巍然として世界の表面に出で來りたる事情、及び成行を能く諒解してゐる。



「苟も彼（ブース第一世）の性情が、不安の際には、彼女は意氣昂揚した。苟も彼女が逡巡 遲疑したる時には、彼は巖石の如く動かなかつた。彼等固より過失があつた。然も兩者の人格は、互ひに相ひ乗除して、其の完きを得しめた。」此れは其子の證言する所。何たる羨ましき好夫婦であらう。

## ニ ブース一世と二世

家康は其子秀忠に對し、半は不安、半は猜疑の念を懷いた。猜疑は實に這の大なる人物の、一大黒點であつた。故に秀忠も亦た其父に對して、自から韜晦した。而して彼は其の大なる父を愛するよりも、寧ろ之を憚り恐れてゐた。併しブース第一世と、第二世の關係は、此程水臭きものではなかつた。

予は今茲に兩人の人格に就て、其の高下を判することを敢てしない。されど少くとも彼等は、互ひに其の性格を殊にしてゐる。子は豪傑の肌合が勝つてゐる創業者であつた。父は常識者の肌合が勝つてゐる相續者らしく見受くる。

二世ブースは、本年（大正十五年）三月八日にて、満七十歳に達した。而して彼は二十四歳の時から、三十二年間、其父ブース大將の參謀總長として、其の帷幄に任じ、爾來第二世救世軍總帥として、今日に至つた。而して彼が第二世となつたのは、其父の子と云ふばかりでなく、乃ち然らざるも、當然彼は第二世たる可き資格者であつた。

凡そ世の中に、父となり子となるもの、何んぞ限りあらむ。然も予は未だ彼等父子の如く、相ひ得たる者多きを見ない。彼等は其の性格の同じからざる如く、其



の意見も、亦た時に相違したのであらう。而して互ひに強き個性の所有者として、それを枉ぐることは困難であつたらう。されどそれはそれとして、彼等父子は互ひに相ひ敬愛した。而して亦た互ひに相ひ諒解した。此れは彼等が信仰と云ふ大なる共通點に於て、一致したるが爲めとも、解釋が出来る。されどその信仰に於て、共通點を見出すことさへも決して容易ではない。

信仰を一にし、事業を一にし、而して其の生前には父の參謀總長として、父の第一の股肱となり、其の死後には父の遺業を紹成して、其の第二世となる。凡そ人生の凡有る幸福の中に於て、斯父の如き仕合者があらう乎。將た斯子の如き仕合者があらう乎。

西洋では親孝行は流行らないと、利いた風のことを言ふ者あるが、ブース父子の例には、決してさる説は當て嵌らない。彼等父子の關係は、實に慈父孝子以上だ。

### 三 ブース二世と政治家

第二世ブース大將は、最も世故に練達したる一人だ。其の五十年間の交遊は、決して自個環内の者のみに限らない。されば此の書中にも、讀み來りて、隨分面白い話も多く、興味多き觀察も少くない。今ま手當り次第一二を擧げんに。

ブライトは、*グラッドストーン* 翁が其の同僚に無届にて、其の紙鳶(愛蘭自治問題に就て)を颺げた事を晒つた。ブライトは屢ば繰り返した、何故に彼(虞翁)は我等に相談しなかつた乎と。ブライトは虞翁が、愛蘭自治問題に就て、其の意見を豹變したのを、不快に感じたるよりも、寧ろそれを其の同僚に、豫じめ



告知しなかつたことを、より憤慨してゐたかの如く見受られた。

云ふ迄もなく、愛蘭自治案の議場に上るや、自由黨中の意見は、賛成と反対とに岐れた。而して其の黨員の中でも、ブライトの向背を見て、賛否を決せんとする者が少くなかつた。流石のブライトも、其の多年親友たる 虞 翁 に向て、正面から反対論を浴せ掛けることを、敢てしなかつた。されど彼が沈黙せる表決は、辛辣、痛快、骨を刺し、心を剜るチェンバレーンの雄辯なる反対論よりも、斯案の運命を定むるに有力であつた。虞 翁 も確かに人を取扱ふの伎倆に於て、缺點があつた。

又たソルスベリ侯と、汽車中にて、第二世ブリス大將が、屢ば出會したる事を記してある。

ハットフィールド（ワ侯の地方邸宅在る所）は、予の往復する停車場と、同一の鐵道線路に當り、従て往々侯が倫敦より往復するを見受けた。時として侯が先在に氣付かず、侯が獨坐する車箱の中に飛び込んだ。予は往々侯が新約聖書を讀みつゝあるを見、一度か二度かは、祈禱書を手にするを見受けた。我等は屢ば小話を交換した。或時侯は特に救世軍の働きを奨励し、且つ即今我等に絶えず降りかゝりつゝある攻撃を、餘りに氣にする勿れと忠告した。

ワ侯は腹の底からの貴族だ。而して彼の外形は、如何にも超然として、他と親しまず、一切の世事を冷眼に看るの趣があつた。而して侯の趣味は、寧ろ科學にあつたと聞いてゐる。然も亦た侯は敬虔なる基督信徒であつた。

人間は實に感情の動物だ。ブライト程の老成人にして、且つ醇眞の人にして、尙



は彼の自尊心を傷けられたるを、瞋るを免れない。政治家たるも亦た難いかなだ。

#### 四 ステッド、ローズ、エドワード七世

大記者ステッドと、ブリス父子とは、極めて親密の關係があつた。彼は救世軍創立者の『最暗黒の英國及び其の出離』の著述を、助け成したる者だ。ステッドの倫敦賣淫窟の内状暴露の運動に就ては、ブリス二世は、恐らくは其の最も有力なる提携者であつた。但だステッドは餘りに深入りして、刑事上の罪人となり、二世は、無罪放免となつた差別はあるとしても。

ステッドと、セシール・ローズとは、其の帝國主義に於て、共鳴する所があり、ローズはステッドを、其の遺言書實行者の一人と豫定したが、南阿戰爭に際して、

ステッドが餘りに猛烈に反對論を唱へた爲めに、遂ひに之を取消した。

此れが爲めに迷惑したのは、救世軍であつた。

ローズの英國にあるや、彼の財産を教化事業に使用す可く、遺言書を認め、ステッドを其の委員の一人に選定し、且つステッドに向て、救世軍を援助す可き旨を授けて置いたと、予に向て語つた。然るにステッドが、其の遺言書から削除せられた爲めに、從て其の機會は無くなつた。

セシール・ローズに就ては、書中に可なり珍談が叙せられてゐる。其中にても、最も面白き一は、

御身は幸福の人である乎〔問〕  
どうして、幸福杯とは思ひも寄らない。

ブリス二世の近著



若し御身の老人（ブース一世を斥す）の信仰が、予にも得らるゝならば、予は予の全所有を擧げて、之を得るであらう。予は新たなる國家を作らんと試み、御身は新たなる人を作りつゝあり。御身等父子の爲す所は可矣。要するに予はとても御身等には叶はない。〔答〕

若干ブース大將の方に、手前味噌はありとしても、或は此れがセシール・ローツの本音であつたかも知れない。予は斯く信せんと欲す。

偶然にも茲に濶達大度なる英國先帝エドワード七世の、資質を證明せらるゝ一事があつた。即位の大禮に際して、救世軍からも、一人の代表者を参列せしむ可き、勅命が下り、愈よ當時の参謀總長、第二世ブースが、その役目に當ることとなつた。

問題は服装だ。彼は救世軍の制服にて参列するの特許を、大禮總長官ノーフオーク公に請うた。公は婉辭もて、そは到底長官の権内にて、許可す可き限りでないといつた。此に於て第二世は、千思萬考の餘、直ちに臨幸先なる皇帝に、一書を呈して、其の勅許を請うた。其の翌朝直ちに侍從長から返電が來た。そは陛下は救世軍の制服にて、御身が参列するを、悦んで勅許あらせられ、且つ御身の捧げたる奉賀狀を、御嘉納あらせ給ふと。此にて一切の葛藤は解け去つた。

### 五 統率者としてのブース第一世

書中尤も讀者の心を惹き著くるは、其子が其父に就て語る所だ。今筆を擱くに際し、試みにその一二を摘要せしめよ。



彼は如何なる種類の人の中にも、その善良にして、且つ有用なる資質を發見するの、最も調法なる天稟を持つてゐた。而して其の器能が、歳と與に愈よ確的、愈よ正當となつて來た。其の壯年の際には、時として間違もあつた、されどそは樂天的の過誤であつた。餘りに光明の點を超信しての過誤であつた。

彼は亦た統率の力の所有者であつた。彼は其の配下から服従せられた。彼が行けと命ずれば、配下は行いた。來れと命ずれば、配下は來つた。

救世軍の大將は、其の何故たるを、自から解せしめずして、彼等を擒にし去つたことは、米國の或る有名なる一人が、親しく華盛頓に於ける、ブーース大將の集會に於ける、印象に就ての告白であつた。

然も此の統率の力は、天性でもなく、遺傳でもなく、全く彼の多年の刻苦、鍛練より來れるものであつた。

但だ彼は命令するよりも、更らに他を鼓吹した。蓋し其人を鼓吹し、人々をして、吾自ら吾に信頼するの力を發揮せしむるは、實に偉大なる器能と云はねばならぬ。

更らに彼をして人物統率の上に於て、成功せしむる資格の一は、其の一切の細條節目を善く取り扱ふ力だ。彼は粗枝大葉ではなかつた。彼は細心であり、小心であり、詳審であり、一步一步に、その用意を加へ來つた。

更らに首領としての偉大なる資格は、其の公正なることだ。彼には一切の依怙



最良が無かつた。彼も人である。勿論愛憎もあつた、好悪もあつた。されど事  
一たび救世軍に就ては、彼の前には何等の個人的干係は無かつた。何人にせよ、  
何物にせよ、歸する所は、唯だ公平であつた。

彼は亦た如何なる境遇にも、善處し、適恰するの才を有した。彼は上は王公よ  
り、下は街頭の賤民に至る迄、各々對等の立場に於て應接し、其の相手をして、  
各々其の處を得しめた。彼は自から誇つた。曰く、我が人を讀むは、書物を讀  
むと一般である。

然も最後に彼が所有する人物統率の、資格の最も偉大なるは、彼の愛、彼の好  
意であつた。彼には慈惠の泉源が、混々として絶えなく湧き出でた。彼の同胞  
に對する愛は、無盡藏であつた。

彼が會て成功の秘訣に就て、其の士官に語りたる言葉の中に、  
諸君が屢ば聽かんとする成功の秘訣は、茲に存する。そは天稟でもなく、學  
習でもなく、將た特別なる機會でもなく、世間的の幸運でもなく、唯だ赤心  
が熱烈にして、神聖なる天火の、焔の燃え盡す所に在る。

以上は折角ブース第二世から寄贈の好意に對し、一讀之餘、感興に任せて之を摘  
載した。譯語は簡潔を主として、節約したるも、其の大意には間違なしと信ずる。

(大正十五年十二月)

### 老虎の新著

老虎の新著



一生を戦鬪に盡瘁したる老虎—クレマンソーは、ヴェルサイユ平和會議を打止めとして、其の晩節を、蕭條たる海村の砂丘、松林の小菴に送りつゝある。彼は日本の五月、鯉幟を、庭の一角に颺し、木床、菜食、殆んど修道院的の生活を樂んで享受しつゝある。

此の退隱中の産物として、世に出でたる一冊は、希臘の末期の大辯士『デモステネス』である。傳と云はん乎。將た論と云はん乎。何にしても眇乎たる小冊子のみ。

デモステネスに就ては、既にブルタークの英雄傳中、羅馬の大辯士シセロとの合傳がある。今更ら老虎の著作としても、それ以上に云ふ可きことも、論ず可きことも、將た評す可きことも多くはあるまい。且つ大體に於て、ブルタークの叙説する所は、先づ公平に庶幾しと云はねばならぬ。

デモステネスは、希臘の末期に際し、雅典の一市民として、其の三寸の舌を以て、能く敗殘の希臘列國を糾合し、以て北方に崛起したる勁敵、マセドニヤの勢力に對抗せんことを勗めた。

彼は辯士であるのみでなく、亦た策士であつた。彼が外交的手腕は、遙かに波斯王と結托し、其の力と金とを假りて、以て其の目的を達せんと努力した。然も相手は老獪なるヒリップ、及び絶代の英雄、亞歷山大王の父子だ。而して味方は利慾に目なく、我利的に敏に、公共的に鈍なる希臘列國の市民だ。彼が其間に於ける苦心は、固より察するに餘りありだ。

吾人は老虎の此書を讀んで、何等デモステネスに就て、新たなる發見を做さばなり。



されど其代りに大なる獲物があつた。それはクレマンソー彼自身に對する發見だ。

此書はデモステネスの評傳と云はんよりも、寧ろ老虎彼自身の評傳だ。所謂他人の杯酒を藉りて、自己の壘塊に澆ぐとは、老虎が此書を著したる不用意中の用意だ。

老虎はデモステネスの最後に就て、斯く云うてゐる。

彼は最後に際して、其の高尙なる、義舉(希臘の獨立)以外、一點の他心なかつた。彼は苦んだ、彼は争うた、而して其の國家の爲めに、全幅の献身的努力を、寸毫も妨げらるゝことなくして、其身を致した。斯くて從容として死に面した。

前人は彼を各時代を通じての最大雄辯者と讃した。然もそれ未だ十分でない。

言にして行の伴はざるは、空音に過ぎない。要するに全き意味に於て、デモステネスは人である。それで可矣だ。若し讀者が能く此言を玩味せられれば、更らに一層可矣だ。

デモステネスは、果して老虎の評値したる程の人物であつた乎、否乎を審にしない。されど老虎彼自身は、正しく其人だ。彼は人である。然りクレマンソーは人である。

(昭和二年五月二十六日)

### 英國ヴィクトリヤ朝の影

如何なる有力者も、時の波には抵抗が出来ない。愚痴も、苦情もない。我等は只

英國ヴィクトリヤ朝の影



だ潔よく其前に叩頭せねばならぬ。

英國のヴィクトリア朝は、我等に取りて政治的にも、文學的にも、思想の上からも、趣味の上からも、一種の愛著を持つてゐる。宛も我等が成長しつゝある時代のヴィクトリア朝の人物は、社會とは、種々の方面から、我等に刺激、諷示、指導、感化を與へてゐる。然るに今や其の影が、追々と薄くなりつゝある。我等は自己の老を嘆ずるよりも、其の周邊の變化の甚だしきに驚かざるを得ない。

本年に入りて政治上に於ては、ヴィクトリア朝の新人であつたアスキス—牛津伯—は逝いた。同時代の文學の巨匠であつたトーマス・ハアデー君は逝いた。而して頃ろ又た作家でもあり、且つ批評家として、殆んど絶特の位地を占めつゝあつたゴス翁を喪うた。

然るに最近には、トレヴェリアン君の訃に接した。君はマコレー卿の姪にして、且つ其の傳記の著者だ。此書はヴィクトリア朝を通じての、凡有る傳記中に於て、最も好評を博したる一であり、且つそれ丈の價値のあるものであつた。

英國の自由黨には、首領虞翁を魁として、其の領袖には、學者、文士少くなかつた。其中にもモーレー卿、プライス卿と共に、君を數へねばならぬ。而して其の才華煥發の文章に至りては、最も君を推す可きであつた。

君は本年數へ歳にて九十である。而して英國勳章の最も高貴なる一に位する、有功勳章(O.M.)の佩用者である。翁の長子は、労働黨内閣の文部大臣にして、其の次子は劍橋大學の史學教授たり。其の史家としての造詣は、乃父を凌ぐものが



ある。君や實に後ありと云はねばならぬ。

君や政界に於ても、一人前以上の働を成した。但だ一八八二年五月、愛蘭大臣となり、二年半の後之を罷めたが、君は此の期間に、殆んど其の頭を白盡した。

更らに又たホルデン卿の凶信が傳へらる。彼は何れかと云へば、寧ろエドワード七世以降の人だ。然も彼は大法官ともなり、陸軍大臣ともなり、英獨交渉の、最高外交の舵手ともなり、シオペンハウエルの翻譯者ともなり、自由帝國者協會の幹部ともなり、労働黨の内閣員ともなり得る人である。曾てアスキス、グレー、及び彼は、自由黨中の三人組として、互ひに相ひ扶掖した。今や剩す所唯だグレー子のみ。然も子も亦た『夕陽無限好。惟是近黄昏』の境地に在る。

(昭和三年八月二十二日)

パレオログ (Paléologue) 氏の『カヴル傳』を読む

一 伊太利三傑

曾て伊太利建國の三傑カヴル、ガルバルデー、マッズイニーの合傳を読み、頗る興味を感じ、社友平田久君をして、此を基本として、一書を編せしめ、『伊太利建國三傑』と題し、民友社より出版せしめた。回顧すれば既に三十有餘年前。

頃ろパレオログ氏の『カヴル傳』を読んだ。如何にも面白かつた。事實は小説よりも奇なりと云ふ諺は、宛も此書の爲めに設けたるかの如く感せられた。

カヴルの一生は、近世政治家に取りて、好個の軌範だ。予は伊藤公の愛讀書中に

パレオログ (Paléologue) 氏の『カヴル傳』を読む



は、宋名臣言行録と、カウル傳とがあつたことを知つてゐる。而してモーレー卿の如きは、其の在野黨たる際に於て、カウル傳を著はさんと欲し、その爲めに資料を蒐拾し、且つ伊太利語さへも練習したが。自由黨政權を握り、當局の要人となりたる爲めに、遂ひに其志を果さなかつた。

予の趣味から云へば、伊太利建國三傑中には、誰よりもマッズイニーが好きだ。彼は實際政治家として、殆んど零點であるに拘らず、而して彼は理想家として、空想に馳せ、詭激にして、中道を逸する傾向あるに拘らず、尙ほ彼には多大の愛著を感じてゐる。そは彼が我が吉田松陰と、而して或る意味に於ては、より以上の人間としての、美點の所有者であるからだ。

されど苟も政治家としては、恐くはカウルに比す可き者は、皆無とは云はぬが、其類極めて稀少であらう。乃ち其の稀少中に於て、強ひて比倫を求めば、比公よりも寧ろ我が大久保甲東であらう。

カウル傳としては、最も完全に近きものを、テヤー氏(Thayer)の『カウルの生涯及其時代』(The Life and Times of Cavor)であらう。此れは名著にして、二巨冊一千二百頁に垂んとする。寧ろカウルを中心としての、時代史の看を做す可きものだ。而して餘りに周到なる文、却て讀者には聊か重くるしき憾が無いでもない。

### 二二個の特色

此書の特色と見る可きもの、二つある。第一は、著者が佛人であること、第二は、

パレオログ(Paleologo)氏の『カウル傳』を読む



著者が外交家にして、革命前及び其の當時露都に大使として、駐在したることだ。

カヴルの一世の大事業は、佛帝奈翁三世との交渉であつた。而して其の功績の尤も顯著なるは、外交上の掛引であつた。乃ち著者は此の二要件に對して、宛も誂へ向きの資格を具有してゐる。

著者は其の特色を、隨處に發揮してゐる。されば本書は他のカヴル傳に於ては、知る能はざる佛國側の消息と云ふよりも、其の内情を罄してゐる。而して又た外交上の掛引に於ける、虚々實々の作用を、極めて詳に曲盡してゐる。

予は此書を読み來りて、是れはカヴル傳である乎、將た寧ろ奈翁三世對カヴル決闘史ではあるまい乎と、惑ふ程であつた。

注文を云へば、著者の觀察が、聊か上はすべりしてゐるかの如き點もある。而して其の筆が、餘りに輕快にして莊重を缺き、大事件、大活劇、大難題、大波瀾を叙するには、やゝ物足らぬ心地がする。

予は今更らの如くモーレー卿が、晩節に於ける政治的成功を殘念と思ふ。若し卿をして政治的失意者たらしめ、長く閑地に在らしめば、必らず虞翁傳に匹敵すると云ふよりも、寧ろ更らに其上に駕する大著、名著を見たであらう。

されど吾人は、パレオログ氏によりて、教誨せらるゝ點の少くなきことを、感謝せぬばならぬ。著者は支那人の所謂鏡花水月の筆法を用ひてゐる。其の奈翁三世の優柔不斷、思案當惑を叙するは、カヴルの終極の目的を確定し、それに向て

パレオログ(Paléologue)氏の『カヴル傳』を読む



直前勇進するを、反照する所以であらう。而して著者は流石に外交家だけに、其の眼孔は際どき點まで届き、カヴルの手の裏までも看破してゐる。

### 三 カヴルと女性

カヴルは、名門の出である。彼は生れながらの貴族だ。彼は大奈翁が正に覇威を歐洲に振ひつゝある間、即ち一八一〇年に生れた。彼が如何に早熟であつたかは、彼が六歳の折、即ち一八一六年五月十一日附にて、其の幼き女友に、左の如き書状を與へたことにて分明だ。

私の愛するファンシヨネット嬢よ、私は御身に手紙を書かなかつたことを悲しむ。私は私の怠けを白状する。けれども御身は何故に私を見捨けたの

乎。如何に御身は私をいぢめたよ。予は恒に御身を愛します。而して御身を私のファンシヨネットと呼びます。けれども今私は若き、愛嬌ある、而して可愛き貴女と友達となりました。彼女の名はジュリエット・ド・パロロと申します。彼女は兩度程、彼女の美麗にして鍍金したる馬車にて、遊び廻る可く私を誘引に參りました。

左様ならば

御身の少なる友

カミル

六歳の小兒の手紙としては、餘りに小まぢやくれてゐる。されどダンテは九歳にして、既に戀人を慕ひ、バイロンは八歳にして、情婦を作らんとしたと云へば、必ずしも一笑に附す可きではあるまい。

パレオログ(Paléologue)氏の『カヴル傳』を読む



カヴルの一生を通じて、女性は彼の重なる追求物の一であつた。彼は片時も女性なくしては、生活する能はなかつた。されどそれよりも大なる追求物は、政治であつた。即ち大半は政治、小半は女性、此れが殆んど彼の全部であらう。

多くのカヴルの傳記は、政治に詳にして、女性に略してゐる。されどパレオログ氏は、カヴル對女性にも、頗る突き込んで書いてゐる。而して著者は斯る戀愛事件にも、其の奥底には、政治あるを看破せずには已まなかつた。即ち言ひ換ふれば幾多の女性を、政治的目的の方便に使用したることだ。

### 四 彼の出身

カヴルは當時貴族の恒として、軍人となつた。彼は兵學校に入りて、工兵尉官となつた。されど軍事は彼の所好ではなかつた。殊に軍紀軍律などは、彼の不羈の性質の、到底忍受し得る所でなかつた。さればやがて其職を去りて、其父の爲めに、田舎の所領地の支配者となつて、専ら其の經營に従うた。

彼は或時には前途を悲觀して、自殺せんとまで思ひ込んだ。されど聰明なる彼は、其の土地の經營に於て、少からざる成功をなし、彼自らも亦た富者となつた。而して其間に佛國を経て英國に遊び、大いに得る所があつた。其の英國への同伴者は、佛國の文士的政治家即ち世界的名譽ある好著「米國に於ける民政」の著者、ド・トクウイルであつたことを、記憶せねばならぬ。

彼は専ら經濟學を研究した。然も純理ではなく、實際問題だ。彼は英國の議院制

パレオログ(Paleologus)氏の『カヴル傳』を讀む



度と、英國の經濟組織に於て、深く理會した。

彼は夙に其志を伊太利の統一に立てた。而して統一の業は、サヴォイ家を中心とし、其の勢力を根本とし、自餘の勢力を糾合して、之を成就す可きことを期した。

彼は此の大經綸の爲めに、一生を献げた。彼は所謂勤王家でなかつた。サヴォイ家に對して、臣屬的忠義心の持主ではなかつた。されどマッヅィニー一派の理想的共和主義や、ガリバルデー一派の烏合的一揆では、其の目的が成就せらる可きものでないことを知つてゐた。されば彼は自から英國流の自由主義に立脚し。之を現時の伊太利の情勢に適合して、其の目的を實現せんことを努めた。

彼は此れが爲めには、新聞紙をも發行した。而して諄々として、溫和、穩當なる立君的代議政體を樹立するの、尤も必須なるを論じた。而して一八四八年六月二十六日に至りて、彼の政治的進路は、忽ち眼前に開け來つた。即ち彼は四個所の選舉區から、同時に選出せられて、議會に出でた。

### 五一 大賭博師

カヴルの議員となりたるは、宛も國歩艱難の時であつた。ビッドモンド王國の兵は、壞地利の兵に敗られ、國王アルバートは、退位を餘儀なくせられ、其子ヴィクトル・エンマニユエルは之に代つた。

カヴルは到底伊太利の統一は、自力のみでは不足であることを實驗した。而して



此上は英佛の援助が、尤も有効である可く自覺した。即ち英の精神的同情と、佛の物質的合力とによりて。

凡そ世の中にカヴルほど、他人の禪にて角力を甘く取りたるものはあるまい。單に他禪者は少くない、されど彼が如く成功したる他禪者は、近世史上、恐らくは彼一人であらう。而して其の顛末を、尤も痛快に叙述したるものが、此書の卓越したる本色の一だ。

一八五〇年十月十一日、彼は商務大臣に任せられた。首相ダゼグリオが、彼を推薦するや、ヴィクトル・エンマニユエル王は、

卿はカヴルを、予に選任せよと申す乎。予も斯くあらんことを望む。けれども卿は彼がやがて、卿等の大臣職の一切を、引き受くることを覺悟せねばならぬ

ぞ。

と。果然カヴルは商務、農務、海軍、大藏の諸省長官を一手に掌握した。而して一八五二年十一月四日には、首相となつた。而して同日恰も佛國元老院議員は、第二帝國を設立す可き會議の爲めに、招集せられた。斯くて奈翁三世は、やがて帝位に陞つた。

此れからが歐洲舞臺の一半は、カヴルと、奈翁三世との立合となつた。カヴルは本來一大賭博者だ。彼は金錢には執著しなかつた。彼は寧ろ放浪である程、其の私經濟には寛大であつた。然も彼が骨牌や、相場を愛好したるは、單に其の利得の爲めでなく、寧ろ其の一擲千金の運命に、趣味を持つた爲めだ。されど彼の一大賭博師たる所以は、國家其物を孤注とするが爲めであつた。



### 六 クリミア出兵

カヴルの一大賭博は、露國對英佛のクリミア戦争に、參加したることであつた。ピッドモンドは、伊太利の北部に於ける、一小王國だ。然も塙兵と戦うたる瘡痍未だ癒えてゐない。それに何の必要ありて、遙々と黒海を超えて、英佛のお味方をなす可く、軍隊を繰り出さんとする乎。それが眼快手利のカヴルのカヴルたる所以だ。

然も此の考案は、先づ彼の姪女アルフイエル侯爵夫人の口から出で來つた。カヴルは彼女を親愛し、恒に其の退食の時間を、彼女の側にて過した。一日彼女は卒爾として問うて曰く、

御身は何故に一萬の軍兵を、クリミアに送り給はざる乎。

カヴルは其の心中を看破せられたるかの如く驚き、其眼を閃めかし、大息しつゝ、答へて曰く、

アー、若し人々に御身程の勇氣があつたならば、此事も好都合に運んだであらうに。

と。斯くて一秋を過ぎ、彼の姪女は、再びカヴルに向て、此事を問うた。此時はカヴルは、頑として應對しなかつた。彼女は叫んで曰く、

兎にも、角にも、何時吾兵はクリミアに發程す可き乎。

と。彼は曰く、それは判らない。英と佛とは、頻りに其事を慫慂するも、とても手が著けられない。我が内閣はなかく相談に乗らない。ラッタズイや、予の親友ラ・マー



モラさへも、辭職せんと脅しつゝある。但だ仕合には王様が予の方であるから、王様と共に、何とか都合をつけたいと思ふ。

實にカヴルが、先づヴィクトル・エンマニエル王を説伏したのだ。其の同僚と、議會と、輿論とを、誘引して、此事を賛同せしむるには、實に非常の忍耐と、努力と、苦心とを要した。彼は反對論に答へて曰く。

此は只だ國家の利益であるからだ。クリミアに於て得たる、吾兵の月桂冠は、伊太利の前途に取りては、世界に於ける一切の雄辯よりも、より大なる價值がある。

と。此の如くして彼は遂ひに出兵の事を、實行するに至つた。

### 七 議院政治の信徒

世人は往々カヴルを以て、比公に較べてゐる。一方はサヴォイ家を中心とし、ビッドモンド王國を中樞勢力として、伊太利を統一し、他方はホーヘンツォレン家を中心とし、普魯西王國を中樞勢力として、獨逸を統一した。然も其の併行線は、此に止まる。

比公は鐵血政治家だ。彼は固より時に應じては、勸誘手段を用ひないことはなかつた。されど概して彼は其の實力を擁して、其の所志を力づくにて強行した。彼の前には王もなく、民衆もなかつた。彼は只だ其の所信をば、一切の障害を蹴破して、之を強行した。

パレオログ(Paleologue)氏の『カヴル傳』を讀む



之に反してカヴルは、飽く迄議院政治家であつた。彼は或時には強迫をも用ひ、或時には甘言をも使つた。然も何れにしても彼は伊蘇普物語にある風の神よりも、太陽であつた。

此れは彼が比公の如く、其の資本たる強迫的實力の、缺乏したるが爲め、餘儀なく、勧誘の方便に訴へたものであらうとの説もある。されど假令彼に比公程の實力あらしむるも、彼は比公の如く、之を使用しなかつたであらう。

カヴルは決して空想家でもなく、空望者でもなかつた。されど彼は自由討論の信者であつた。一日彼に諛言を呈する者ありて曰く、若し專制政治であつたならば、如何に御身の仕事は、樂であらうにと。

カヴルは憤然として曰く、

貴君は予が專制政治の下では、宰相たることは欲しないことを忘却してゐる。然も亦た予には專制治下では、其の機會もあるまい。予は何處迄も立憲的國務大臣だ。總ての政治に、それ／＼不便ある如く、議院政治にも不便がある。然も予は之を以て最善と信じてゐる。予亦た或種の反對説には、癩癩が起ること  
を白状する。而して予は之に對しては勇猛に闘ふ。然も翻て考ふれば、予は之を驩迎する。何となれば之に闘ふ可く、予は能力の限りを盡して、予の主張を説明し、予の努力を倍加して、輿論を勸化するを得しめるが爲めに。專制宰相は命令する。立憲宰相は服従せらる可く勧誘し、且つ納得せしむる。予は予の立場が、正しきものと確信する。最惡の議會では、專制政治の待合所よりも  
ました。



と。此れは正しく彼の本音である。

八終局

クリミア出兵の第一大賭博は、果してカヴルに大當りを取らしめた。眇乎たる  
ビッドモンドの小王國は、英佛の大國に伍して、歐洲大舞臺の局面拾收の會議に、  
同等、同權、同位地を占めて、出席することゝなつた。それに附けても、カヴル  
の骨折は、一通りではなかつた。獲物を得るの難きではない、それを物にするの  
難きである。

カヴルの目的は、佛國の力を藉りて、伊太利より埃國の勢力を一掃するにあつ  
た。此れが爲めには、彼は如何なる犠牲を拂ふことも、意としなかつた。然るに

凡そ世の中に、當てにならぬ者として、奈翁三世程のものは少かつた。彼は實に  
瓢箪餘の最上標本だ。然るにカヴルが如何にして、此の瓢箪餘の佛國皇帝を手捉  
りにしたる乎。其の苦心、其の伎倆、實に後人をして、覺えず讚嘆の聲を發せ  
しむ。

彼が奈翁三世との取組は、殆んど他に比類なき相撲だ。而して此の方面に於け  
る、パレオログ氏の叙述、描寫は、微に入り、細に入り、精を極め、巧を極めて  
ゐる。とても有りふれたる小説などを讀んでも、此種の面白味は見出さない。

然もカヴルの目的は、達せんと欲して、又た裏切られた。戰未だ半ばにして、  
奈翁三世は、埃軍と講和し、伊太利統一の業を、既に成るに垂んとして、沮絶せ  
しめた。



カウルは一方には此の油断のならぬ、氣の知れない、表面淡泊にして、裏面に愆深き奈翁三世を相手とし。他方には向ふ見ずの激徒ガリバルデーの一派を相手とし。而して上には趣味性格、悉く己と相ひ反する、ヴィクトル・エンマニエル王を戴き。自ら心臓を喰ひ破るまで、經營慘淡したる消息は、恐らくはバレオログ氏の筆さへも、悉く之を盡し能はぬであらう。

記者はクリミア以後の事を、今少しく詳細に紹介したいと思ふ。されど餘りに面白から、とても之を簡単に叙し去るを名残り惜しく思ふ。仍て姑らく之を中止する。讀者若し原書に就て、之を玩味せば、必らず予の言に首肯せむ。

(昭和三年三月)

### 獨逸の怪雄逝く

スチンネスの死は、惜しきことであつた。彼は戦敗獨逸の大立者であつたと同時に、新興獨逸の大立者であつた。世界で有名の者は、彼一人でない。されど例せばクレマンソーの如きは、過去の人物として高名だ。然もスチンネスは、現在及び未來の人物として、多くの期待を屬せられてゐた。彼は僅かに正午を降りたる、當世男であつた。

スチンネスの年齢は、五十四歳だ。日本の如き老人が威張る國の目安からすれば、尙ほ壯年期だ。彼は今日に於て、獨逸と云はず、中歐に於て、事業界、企業界の巨頭であつた。彼の手は造船、及び航海から鑛業に、製鐵から製紙に、電氣、

獨逸の怪雄逝く



機械各般の工業から、商事、金融に、而して其の最も著名なるは、新聞事業に伸びた。彼は六十幾種の新聞の持主であつた。彼は宛も千手観音であり、而して多々倍々辨じてゐた。

彼の富は幾許ある乎、何人も精確に知り難い。彼は獨逸が損失したる際に、却て其の富を増殖した。世界大戦は、獨逸を亡國たらしめたと與に、彼を一大成金たらしめた。而して馬克の下落は、毫も彼に當惑を來たさなかつた。何となれば彼の預金は、獨逸以外に在つたからだ。而して國內に於ける通貨の變動は、寧ろ彼をして其の鬼没神出の技倆を、逞うせしめた。

彼は獨逸人の特長なる、徹底的と共に、非常なる組織力を有した。彼の凡百の事業に手を著けて、恒に遊刃餘りあるもの、畢竟此に由る。而して今後彼の手は、

如何なる方面に向つて、揮はる可かりし乎。そは揣摩の限りでない。然も獨逸にして再興す可くんば、之を經營する、唯一と云はざるも、其の第一人は彼にあらねばならぬ。然も今や彼亡し、是れ實に嘆ず可きのみ。前には哲學的政治家ラテノ川を喪ひ、今亦た彼を亡ふ。獨逸の現状は、實に泣面に蜂である。それと同時に彼の如き怪物の死は、世界をして聊か寂寞を感せしむ。

(大正十三年四月)

### 米國魂と日本魂

#### グリフィス翁を悼む

予は必ずしも世の所謂る米國崇拜者に與しない。打ち割りて云へば、米國及び米人には不感服の點が少くない。されど其中には亦た眞に敬愛す可き君子人がある。



姑らく記者の親しく知る所を以てすれば、ノルトン教授、ケナン翁、監督ハリス、同志社教授ラーネド先生、グリフィス翁の如き、則ち是れである。然るに今やグリフィス翁の訃音を傳ふ。如何にも嘆惜の限りである。

享年八十五と云へば、壽に於て大なる遺憾はあるまい。但だ記者には何となく明治初期の歴史が、翁の永眠と共に、遼遠の空に飛び去りたる心地がする。翁は實に福井藩の御雇教師にして、藩主松平春岳公との面識があつた。而して維新當初の諸老は、概ね翁の交る所。翁は實に廢藩置縣以前の日本を知りたるもの。翁は實に我等を維新當初に繋ぐ、唯一ならざるも、其一の綱であつた。

中村敬宇先生は、翁に就て斯く記してゐる。

希利比士美國に在る時、勝海舟君の長子に教授す。既にして福井藩良師を求むるや、希利比士召に應じて至る。至れば則ち郷の子弟を訓迪し、忠厚紳摯、造就法有り、材俊技藝の士多く出づ焉。

京に來るに及んで、開成校の教師と爲る。余と與に時常に往來し、相得て甚だ驩ぶ也……希利比士性忠厚と雖も、而も或は時に抗直に過ぐ。會ま一二部員と與に相容れず、一旦忿然として而して去る。別に臨んで曰く、吾日本人を愛す、故に部員を怒ると雖も、而も全國を親しむの心、爲めに少しも減せざる也。余之を聞いて其情厚きを喜ぶと雖も、而して亦た以て竊かに愧づ焉。

余之（其著維新外論）を讀んで希利比に遇ふ如し。面目鬚眉、聲音笑貌、歴々として紙上に現出す矣。因て憶ふ發するに臨む前數月、希利比屢ば茅舎を訪ひ、



叩くに種々の事を以てす。余應答響の如くなる能はず。而して希利比は則ち筆を把りて疾く書する飛ぶが如く、手腕殆んど疲る、而して尙ほ已まざる也。

以上を見れば、壯時のグリフィス翁の、如何に血性男兒であつたことが判る。開成校は、現在東大の前身である。

大正十五年の暮、翁が夫妻相携へ五十二年振り以來朝するや、其の到著の夕、予と與に國民講堂に於て演説した。當時翁は予と明六社に於て相識れりと語つた。然も明六社は明治六年福澤諭吉、西周、津田眞道、西村茂樹、中村敬宇諸先生の結社にして、森有禮子の如きは、其の仲間の中にて、寧ろ年齢に於ては後輩に屬してゐた。

予の如きは當時十一歳の小童にて、九州の片田舎にあり、固より翁と相見る譯合のものではなかつた。然も翁が斯く誤解したるを見ても、如何に明治初期の日本が、翁の腹一杯に充溢したかと思ひやらるゝ。

予は明治天皇記を編す可く、其の資料を採拾せんが爲めに、來朝したと云ふ。惟ふに歸來、定めて之に著手したであらう。果して完成したる乎、否乎。何れにしても翁の過去に於ける、日本紹介の勞と功とは、實に偉大と云はねばならぬ。蓋し翁の米國魂は、我が日本魂と相ひ通ずる所があつた。今や亡し、悲夫。

(昭和三年二月八日)

### マクドナルド氏の旅行記

マクドナルド氏の旅行記



一代の政治家は、必ずしも一代の文宗であらねばならぬ譯はあるまい。されど徳川時代の賢相、若しくは明相と云ふ可き松平定信、水野忠邦の如きは、相當の學者でもあり、相當文藝の嗜好と、教養とを俱有してゐた。

頃ろ英國労働黨首領ラムセ・マクドナルド氏の Wanderings and Excursions (放浪と遊覽) を讀む。此れは著者が最近二十餘年—其の大部分は最近四五年—の小品文を蒐めたるもの。

第一篇の故郷に於ては、少年時代の追懐記が多い。第二篇の英國及びウエルズは自國內の勝遊記である。第三篇の旭光に向ては、専ら東方の旅行を叙し。第四篇の國際的は、歐洲に於ける社會黨運動を語り。第五篇の政治及び政治家は、戰爭に於ける社會黨の態度、及び其他に就て、或は釋明し、或は主張してゐる。

記者は佛國の老虎クレマンソーが、特に紀行文に秀でゝゐることを聞いてゐる。但だ不幸にして、未だ親しく之を驗し得ざるを憾とする。然もマクドナルド氏の紀行文や、實に面白い。而して其の面白いのは、概して簡潔であるからだ。

彼は東西南北の人だ。伊太利、希臘、君 府、ジョルジア、埃及、パレス  
タイン、印度、布哇、南阿、何れも本書中に其の鴻爪の痕を残してゐる。但だ彼  
は未だ支那と日本を見舞はない。若し彼をして奈良や京都を見せしめば、彼は如  
何に之を品評するであらう乎。

彼は單に風光を觀る眼孔の持主ばかりでなく、又た史情にも饒んでゐる。彼が  
牛津に於ける一文の如きは、懷古の情趣横溢してゐる。とても腕と拳の、勞



働黨の首領の文とは思へない程に。

何れの文も面白いが、別けて彼が英國海峽の諸島に就ての一章は、是等の小嶼を、掌の上に取りて見るが如く、其の光景を描いてゐる。而して是等諸島は、古往今來、偉人、傑士の流竄したる隱家にして、ヴァクトル・ユーゴの如きも、其の一人であつた。彼がゼルシー島にあるや、其の官憲と葛藤を惹起し、同人三名は放逐せられた。

此に於て彼は勃然怒號して曰く、吾人は唯一の愛を持つ、それは眞理だ。唯一の語を持つ、それは正義だ。いざ吾人を放逐せよと。彼も此の言葉を名残りに、  
グルンシー島に移り、此處にて彼は平和と、小説とを享受した。

而してマクドナルドも、他日此の孤嶼に流竄せらるゝの日を楽しみむ程、理想的流竄郷としてゐる。

本書の人物評にて、佛國社會黨領袖のジョーレス論は、實に濃厚なる同情と、深透なる諒解とを以て作りたる、一種出色の文字だ。ジョーレスは、世界大戰開始當時、刺殺せられたが、彼も亦たその流儀に於ける、一種の愛國者であつた。

予は決してマクドナルドと、政見を一にする者ではない。されど文章は市に定價あり。其の好惡愛憎によりて、之を差別す可きものではない。反對黨新聞『モーニングポスト』が、政治家としては、一向に入用なき男だが、旅客としては、愛好す可き立派の作者であると云うたのは、尤の次第と思ふ。

(大正十五年九月十二日)



### 歐洲外交の近時の示現

(RECENT REVELATION OF EUROPEAN DIPLOMACY)

—

予が頃る讀んで、最も有益と覺えたるは、英國の史家グーチ博士 (Googh) の、歐洲外交の近時の示現の一冊だ。此れは菊判二一八頁の、寧ろ此種の書籍としては、分量少き方なれども、其の内容の充實は、驚嘆に値ひする。

此書は世界大戰以來、本年に至る迄、歐米各國に於けるあらゆる刊行せられたる文書の。前獨逸皇帝ウイルヘルム二世の即位から、ヴェルサイユ條約に至る迄の事に關するものを、殆んど網羅し、且つ其の解題を書いてゐる。

凡そ世の中に書物の解題を書く程手數のかゝるものはなく、又た巧拙の差別の分明なるものはない。何人も紀曉嵐が、四庫全書の目錄提要を書いたる手際に、感服せぬ者はあるまい。グーチ氏の解題に至りては、亦た異曲同巧だ。

グーチ氏は博洽無比なるアクトン卿の提撕の下に出で來りたる、英國近來の史家だ。然も彼が自家の主義主張を、熱心に把持しつゝも、其の離隔的精神もて、其の研究的態度もて、一切の史實を會通し、之を批判する公平振りには、殆んど面憎き程感心だ。否な振りと言はんよりも、寧ろ單に公平であると云はねばならぬ。

此書は第一獨逸、第二奧國、第三露西亞、第四近東、第五佛國、第六白耳義、第

歐洲外交の近時の示現



七英國、第八米國。而して最後に結論がある。此中にも其力の籠りたるは、獨逸と英國との二章であらう。特に獨逸には最も其力が籠つてゐる。

グーチ氏の著には、英國流の島國的氣分が、殆んど見當らない。乃ち英國人の立場から云へば、恐らくは彼が餘りに公平なる爲めに、慊らぬ節もあるであらう。されど彼は必らずしも自國を他國視して、他國を自國視する程の、錯誤的世界主義者に伍す可き一人ではない。要するに彼は只だ偏僻心少き平正の史家だ。

二

世界戦争の一の現象は、澤山なる寡婦の製造と、澤山なる自叙傳の發行だ。此の自叙傳は、概して己を深くして、他を咎むるもの。云はゞ一方に於ては、雪冤文學であり、他方に於ては、彈劾文學である。而してそれが獨逸に於て、最も劇

甚である様だ。

自國を主として、他國を奴とする迄は、姑らく勘辨が出来るとするも。例せばルイデンドルフ將軍は、戦敗の責任を文官に嫁し、叱咤怒號してゐる。前首相ベトマン・ホルウエヒは、寧ろ自力の不足であつたことに、愚痴を滾してゐるが。然も其の大事を誤つたのは、海陸の武人であつたものと認めてゐる。

特に責任轉嫁の親玉は、前獨逸皇帝にして、其の回顧録には、何事をも、其の失策は、私の肩から他人の肩へと押しやりてゐる。彼は自から何等の失策もなく、過誤もない。只だ其の輔弼者の失策、過誤を匡濟、訂正せんと、其の最善の努力を試みたるも。立憲君主として、其の用力の範圍が劃定せられたれば、之を如何ともする能はずとの申譯をしてゐる。



此の申譯の立たぬことは、グーチ氏も、能く辨へてゐる。されど前獨逸皇帝が中心から好戰的でなく、寧ろ平和を望んでゐたことは、當人の辯明する迄もない事だ。

一時世上に喧傳せられたる、彼が其の在位の際、隣邦を侵撃せんと企畫したる大陰謀、大野心に就ては、一片の證據だにない。されど彼が世界の共同生活に於ける、攪亂的要素であつた事は、事實の暴露によりて、愈よ其の印象が深めらるゝ。

彼が英國の政策に對する深甚の不信用。佛國共和政府に對する無限の侮辱。平民主義に對する病的の畏惡。其の躁急、其の輕信、輕疑は、其の曾て臣民であつた者の多數と、其の遠方からの觀察者にとに論なく、彼が帝王の器でなかつた

ことを、確信せしむるに餘りあつた。

以上は前獨逸皇帝に對する著者の批判だ。此れには自惚の前獨逸皇帝も、申し返へす言葉はあるまら。

三

三帝國の没落は、秘密外交文書の洪水を世上に氾濫せしめた。獨逸を手始めとして、露國も、而して奧國も、追々と其の玉手箱を發いた。特に露國では、勞農政府が、列強の面皮を剝ぐ下心もて、彼等の間に取り換はしたる、秘密證文を、その儘に暴露したれば、此れが爲めに、痛手を負うたる政府も少くないが、然も史家に取ては、勿怪の僥倖であつた。



此の大勢に刺戟せられ、英佛の協商國側も、そろく秘密箱の口を開き初めつゝある。それが何處迄徹底するかは、今尚ほ問題であるが。即今の電報一十月十日によれば、日露戦争前後に關する外交文書が、英國にて公刊せられたと云へば、やがて全部若しくはそれに近きまでに、公開せらるゝ日が來るものと信せらるゝ。

グーチ氏、彼自身亦たテムパレー氏と共に、外務省の依頼を受けて、編纂中であり、既に其の若干を出版してゐる。されば彼が其の専門たる歐洲近世史の權威である如く、世界大戰文學の權威である可きは、固より疑を容れない。

著者は牛津伯の冷靜、沈著なる論調と、態度とを嘉尚しつゝ、あるが、其の觀察が、協商國側の眼鏡を透してゐることを指摘してゐる。摩洛哥事件で、獨逸の行動を非難しつゝ、佛國が却て之を挑發したる結果である事實を閑却し。奥國の否セルヴィヤ政策を攻撃しつゝ、露都の有力者側から教唆せられたる、セルヴィヤに於ける否奥黨の陰謀に對しては、一言も尤めない杯のことを指摘してゐる。

乃ちグレイ卿に對しても、著者は斯く云うてゐる。

グレイ卿も亦た、双方に於ける他の大活劇の立役者同様、其の敵たる同盟國側と、其の味方たる協商國側とに對し、各々別個の權衡、度量を持つてゐる。と。併し彼はグレイ卿が誠實なる平和の把持者であり、努力者であつたことは、一點も異存を挿んでゐない。



彼の結論は、短文であるが、然も何人にも考慮の食料を提供してゐる。彼はヘゲルの警語を援いて曰く。悲劇は善と悪との交闘ではない、善と善との交闘だと。彼は大戦の起因を、協商側にも、同盟側にも歸せず。一八七一年以來、歐洲を中分して二大武装陣營となしたるに歸して曰く、交闘の起因は、概して云へば、自他の恐怖から來つたと。如何にも至言だ。

(昭和二年十月)

### 三十年後を讀む

子爵グラッドストーンが、其父の爲めに辯じたる著作

親孝行は、東洋人のみの專賣と心得るは、大なる間違ひだ。安政條約の締結者として、日米間にその名を留めたるハリスの如きも、その母の存在中は、殆どその側を離れなかつた。文人マッシュウ・アーノルドの書翰集を讀めば、その母に與へたる書中の文字の、如何に情味の饒くして、眞の孝子とは、斯る人であらうと思はるゝ程だ。

頃ろ予を感嘆禁ずる能はざらしめたるは、虞翁の子供達の、その偉大なる父に對する孝行である。虞翁の子として生存するは、ヘンリー・グラッドストーンと、その弟子子爵グラッドストーンである。孟子は五十にしてその父母を慕ふものは少れなりと申した。然も子爵は本年七十五歳だ。かれはなほその父を慕うてゐる。

三十年後を讀む



苟もその父の名譽に關する問題には、今にも猛然として、その渾身の力を傾注して、その真相を明かにせん事をつとめてゐる。

子爵はその兄ヘンリーと共に、一九二七年二月、ライト大尉の著書中、その父の私行について、譏誣の筆を弄したとて、名譽毀損の訴訟を起し、法廷において、その父の私行の純潔なるを證明し、その勝利を得た。予は實に法廷の辯論を多大の興味をもて讀んだ。

しかし最近には「三十年後」(After Thirty Years)と題する一書を著はし、更にその父について語つた。その題して「三十年後」といふは、虞翁の死後すでに三十年を経たからだ。子爵がその父の死後三十年、モーレー卿の大手筆になる虞翁傳三巨冊出版後二十五年の後に於いて、この書を著述したゆゑんは、種々

の理由もあるべきなれども、バックル氏の編纂にかゝる、女皇ヴァイクトリア書簡集第三卷が、一九二八年一月公刊せられる事が、その重なる一であつたに相違なう。

この書簡集は、一八七九年—一八八五年にわたり、あたかも虞翁の第二次内閣の出で來らんとする以前から、その崩壊せんとする間際にして、一方から見れば英國政治の裏面史ともいふべき貴重の史料にして、平たくいへば虞翁第二次内閣の彈劾史論といふべき程の痛快文字である。

女皇の虞翁嫌ひは、公然の秘密といはんよりは、公然の公然だ。而してこの書簡集には、實に無遠慮に虞翁の政策の失態を歴擧したるのみでなく、虞翁その人に對してさへも、少からざる非難、攻撃を加へてゐる。



さればその子供達が、その父のために、無實の冤罪を雪ぐべく、遂ひにこの一巻の書を公にするに至りたるも、かれ等の立場としては、もとより容恕せねばなるべし。

二

この書は、子としては、その偉大なる父を、政治家としては、その偉大なる首領を、人としては、その偉大なる人物を、崇拜するの餘に成りたるものなれば、もとより公平とはいふべきでない。特に女皇書簡集の編者及び徴伯傳の著者バツクル氏、その他虞翁よりも、寧ろその反對黨の首領徴伯に同情する人々の著作に對し、義憤の餘に成りたるものなれば、その調子も何となく角立ち、一讀妥當を缺くの感なしとしない。されどその妙味もまた自から義憤の中から湧

き出てゐる。

子爵は南阿總督を打ち止めとして、その父の秘書官から歴任して、國務大臣ともなりたる人だ。偉大なる父の側においては、見る影も薄さも、決して不肖の兒ではない。かれは末子にて且父の愛子であつた。

予は一八五四年に生れ、一八九八年、吾父の死するまで、吾父の家に住した。十五個年間は、父と共に下院にあつた。われ等の家族的生活には、一點の破綻が無かつた。予は餘りに晩きに失せざるに先ち、予の證明を提供するは、予の義務と認むる。

子爵はかゝる意氣込をもて、この書を著はしたのだ。それが如何で人間味から遠かるべきよ。

三十年後か讀む



モーレー卿の虞翁傳は主として公人としての虞翁を描くに止つた。もとよりその私生活についても、その斷甲片鱗の現れたるもの無いでは無い。されど神龍雲中に没して、端倪し易からざる憾みがあつた。然もこの著はあたかもその憾みを補うて餘りありといはねばならぬ。苟も虞翁傳の讀者は、この書によりて更に得るものが少くあるまい。

およそ世の中に、虞翁ほど世間の耳目に暴されたる人はあるまい。汽車の窓口からさへ演説したるかれは、そのハーワードンの邸宅に、八方から巡禮者を吸引したるかれは、かれに對する凡有るものは、殆んど公開せられ盡した。即ち虞翁かれ一身が、一個の「見せ物」となり、看板となりたる趣があつた。

それにも拘らず、およそ政治家として、かれまで誤解せられたる者は少ないであらう。かれを愛慕する者の多きだけ、またかれを嫌惡する者も少くなかつた。しかしてかれの最大嫌惡者の中に、かれの君主たるヴィクトリア女皇を見出さねばならぬことは、かれに取つて如何に不幸なる事であつたよ。しかしてこの不幸は、女皇かれ自身の側からも、また同様であつた。

三

この偉大なる女皇と、この偉大なる大宰相と、斯かる面白からぬ關係に立ち至りたる理由は如何。子爵グラッドストーンの語る所によれば、元來父と女皇とは、親密の間柄であつた。父は一生を通じて、王室のために、最も忠勤を抽んでた。十九世紀の下半の當初において、英國に勃興せる共和熱を、一身を挺して防止したのは、吾父である。吾父は恒に一方には王室、他方には過激黨の間における緩衝地帯となりて、善くその大勢を善導し、民權の伸張と與に、王室の安泰と尊榮



とを來さしめた。

されば女皇にして、その臣下に感謝せらるべき一人を求め給はゞ、先づ第一に吾父であらねばならぬ。現に一八六二年三月十九日には、特命もて吾父をウインズル城に招かせられ、女皇より腹心を披瀝あらせられた。しかして女皇の吾父に對する態度は、年と與に吾父の進歩的傾向には、聊か疑懼を懷かせられたるに拘らず、殆ど渝る所なかつた。

而して俄然一八七六年以來、憎惡の傾向は出來した。これ何故である乎。子爵はこれを以て、吾父の政敵たる微伯の指金であると明言し、斷言してゐる。しかして虞翁もまた斯く認めてゐたかの如く記してある。問題の關鍵は、實にこの一點に存す。

世間では虞翁を、一個の煽動政治家といひ、若しくは一個の詭辯家といひ、一個の偽道徳家といひ、若しくは一個の偏理論者、若しくは一個の高等政務技師、若しくは政治家の帽子を被りたる僧侶であるなど、種々の批評を下すが、かれは如何に割引しても、第十九世紀における英國大政治家中五指を折る一人であらう。されど天才政治家としては、到底その政敵微伯の比ではなかつたであらう。

虞翁の味方は、微伯は口舌の雄にして、議院政治家としての手腕、及び實際政務に關する施設は、一も虞翁に比して誇るべきもの無いといふも、虞翁は到底平凡の偉人であり、微伯は非凡の偉人である事は、異論の餘地はあるまい。この兩人と一女性との間における三角關係が、所謂十九世紀における英國政界裏面史の最も興味ある點だ。



四

英國女皇ヴィクトリアは、偉大てふ字を獻けても差支なき女性だ。されど偉大でも女性には、女性共通の弱點がある。これは諂諛を好む事。虚榮を好む事。諫争を好まぬ事。尊嚴を冒瀆せらるゝ如き事を好まぬ事。而して何れかといへば、舊慣を改むるを好まぬ事。

グランドストーン 虞翁は決して木強漢ではなかつた。かれは女性に對するの道を解してゐた。凡そ大なる政治家とか、大なる宗教家とか、苟も人類の或者、或部分を率ゐんとする者にして、女性を味方としないものはない。女性を味方とするには、先づ女性を諒解せねばならぬ。

かれの友人の中には、多くの女性達があつた。かの女達との交際振りは、かれの最善であつた。何となればかの女達は、唯だ家族の間のみ能く知られてゐる。かれの快活、諧謔の氣分を、隨意に發揮し得たからだ。斯く子爵は語りてゐる。然るに獨り大なる女皇とのみ相容るゝ能はなかつたのは、何故であらう。

記者は微伯が女皇と相容れたのは、寧ろ微伯が相容れんがために、故らにその技巧を弄した事が、甘くその圖に中りたるがためと認むるが。虞翁が容れられなかつたのは、必ずしも微伯の指金のみとは認むべきものではあるまいと思ふ。微伯は苟もその目的のためには、如何なる手段をも擇まざる程の不謹慎なる横著者ではあつたが。然もその政敵を讒誣、中傷して、これを陥るゝ程の小人ではなかつたではあるまいか。



その原因は何れにもせよ、**虞翁**の政治的生涯の最後二十年間は、**女皇**はかれが朝にあつても、野にあつても、恒にかれを好まなかつた。率直にいへば積極的  
に憎んだとも思はるゝ節が、往々にして認められた。然も**虞翁**がこれに對し  
て、泰然として自から氣付かざるが如く、その始終一貫王室のために忠勤を抽ん  
でたるは、かれの美德といはねばならぬ。何は兎もあれかれが生前に、未だ一度  
たりとも**女皇**に對して、不平がましき、不満がましき口吻を漏さなかつた一事は、  
かれを以て大人物といはざるまでも、**大紳士**といふには餘りあるであらう。

五

男性と女性とは、均しく人間といふも、或る方面から觀察すれば、全く別世界の  
者ではあるまい乎。日本にも平政子などといふ政治家があり、支那には呂后、則  
天武后などと、種々の怪物があり。泰西には露國のカタリナ、英國のエリザベス  
など、著名なる支配者がある。されどかれ等に共通する一の弱點は、一切を愛憎  
によりて審判することだ。

\* \* \* \* \*  
 ヴィクトリヤ**女皇**の如きは、敬虔なる基督教徒として、物質萬能の結晶體ではな  
 かつた。されど愛憎が人と物とを判断する、その尺度の唯一ならざるまでも、重  
 なる一であつたことは、如何にも間違ひない。女皇は**虞翁**ばかりでなく、恐  
 らくはその子エドワード七世に對しても、その太子として、その下半期において、  
 餘り好意を持れなかつた様だ。しかして**虞翁**はその悶々の情を、この皇太子、  
 及び皇太子妃の好意と、同情とによりて、慰め得た様に見受けられた。

\* \* \* \* \*  
 流石の**虞翁**も、その第三内閣を去るに際し、最終の謁見を**女皇**になしたる際  
 の、**女皇**の態度には、頗る心に据ゑかねたる事があつたらしい。かれはその子孫



に、濫りに之を公にすべからずと嚴命しつゝ、その顛末を書き綴りてゐる。然もそれが一通でなく、幾通もある。

一八九四年三月、八十六翁のかれは、その視力と聴力との缺陷のため、一その實は内閣における海軍問題の異議のため一首相の職を罷むべく、女皇に申請した。かれは實に樞密院議員として、女皇の前に宣誓して以來五十三年を過ぎた。然もこの五十三年間の勤勞を了り、最終の謁見をなしたるかれに向つて、女皇は一言たりとも、過去の功勞を謝することなく、また將來の事について語る所なかつた。當時此の老翁は今更何と申し出て善き乎に當惑した。

憐れむべし、一身の肝血を絞り盡したる八十六歳の虞翁は、今や唯だ落葉の風前に於るが如き趣もて、女皇の御前を下らねばならなかつた。かれの心事また

憐れむべきではない乎。然もかれがこの事の模様をば、當時において記録したるばかりでなく、一八九六年一月二日の日記にも、この事に言及し。更に一八九七年二月一日の日記にも、またこの事に言及してゐる。さればこの一事はかれが死に抵るまで、餘程口惜しく思うたことと察せらるゝ。虞翁は決して怨讐の念の熾んなる漢ではなかつた。かれは過去をして過去に葬らしめたる漢だ。而して獨り女皇と最終の訣別の際の際の事において、かくの如き所以は、如何にこの事が、深くかれの心を煩悶せしめたかゞ判る。

この記録は、すでにモーレー卿の一覽を獲たるも、卿はその虞翁傳において、多く觸るゝを避けた。されど今やクックル氏の女皇書簡集公刊せられたれば、虞翁の家族も、その一斑を公にするの自由を得たものと認め、こゝに本著書中に、この一件は記載せられた。



何れにしても、政治は人間の寄り合仕事だ。如何に立法といひ、如何に行政といふも、人間ありての事だ。條約も、法律も、人間を除却すれば、何等の効能は無<sup>な</sup>し。世の政治を説くもの、政治上における人間を忘却する勿<sup>な</sup>れ。

(昭和四年五月)

### 淋しき井

(The Well of Loneliness)

世の中には、其の所作が、往々目的と相ひ反したる結果を生ずることがある。拙劣なる悪思想取締が、却て悪思想を刺戟、激揚するが如き、我等が親しく知る所

昨年英國に於てホール女史著、小説『淋しき井』(The Well of Loneliness)の如き、亦た其の適例であらう。此書は別段世人を驚かす程の傑作ではない。云はゞ十人並の出来榮であらう。然るに英國内務大臣が、世論に刺戟せられ、出版者に向て、其の絶版を勧告し、出版者が任意的に之に應じたるより、頓に世間の大評判となり。佛國に於て出版し、之を英國に輸入するもの無數。而して米國に於ても出版し、賣行甚だ宜しと云ふ。されば著者に取りては、寧ろ内務大臣の干渉に感謝せねばなるまい。而して内務大臣も、其の結果が、此の如きを見て、恐らく呆然、撫然たるものがあらう。

予も亦た世間の流行に促され、之を購讀—米國版—したる一人だ。讀み去りて別段後悔はしないが、さりとて殊更ら讀むことの晩かりしを憾む程の感心もしなかつた。



此書の世間の問題となつたのは、其の題目が不倫であるからとの事だ。されど予は毫も之を不倫とは思はない、唯だ之を不自然と思ふのみだ。然も苟も不自然の事が、世に存在するからには、之を題目として取扱ふに、何の不都合がある。予は毫も差支なしと信ずる。但だ取扱ふと否とは問題ではない。問題は如何に之を取扱ふ乎だ。

此書は其の題目が、世間には餘りに有り觸れざる、希有にして且つ不自然なるを、極めて自然に、慎重に、且つ眞面目に取扱うてゐる。實は餘りに眞面目過ぎて、却て讀者の興味を減殺する程だ。

予は斯る眞面目なる著述の發行に就て、彼是物議を生じたる英國の輿論に不満を

感せざるを得ない。假令輿論と云ふ程ではないとするも、内務大臣をして、斯る手續を取らしむる迄に到らしめたる、其の物議に就て。

他國人が、往々英人を、偽善的と評するの當否は兎も角も、斯る眞面目の著書にまで、彼是難癖をつくるに於ては、さる評判の出で來るも、亦た必らずしも無理からぬことと云はねばなるまい。

二

却説其筋は、極めて簡單だ。要は一の女性が他の女性を戀する事だ。然も其の所謂の女性は、純粹の女性ではない。造化が男女兩性以外に、或は惡戯と云ふ可き乎、將た仕損じと云ふ可き乎、其の氣まぐれにて製造したる、男ともつかず、女ともつかざる特種の混性者だ。



著者ホール女史は、世に斯る混性者あるを認め、それに同情して、其者を主題として、此の一書を成してゐる。固より斯る混性者は希有である。然も絶無でない。既に絶無でないとするれば、之を認め、之に同情するに於て、何の天理人道に妨げかある可き。

彼女が男装すれば、何處やら女らしく見え、女装すれば何處やら男らしく見ゆる。而して彼の父は彼女の生るゝ以前から、男子たる可く期待し、其の生るゝや、故らにステーションなる男子の名をつけた程彼女を男性化し。其の成長も母と與にせず、父と與にし。父は彼女に乗馬、狩獵、一切雄健なる男子の作業をもて教育したから、彼女は其の氣質に於ても、舉動に於ても、自然に男らしくなつて來た。

然も彼女が男らしきは、後天的の教育ばかりではなかつた。何やら先天的にも、不可解の秘密があつたらしい。此の秘密に付ては、本書には何とも明示してないが、それとなく全篇に通じて、讀者に暗示せしむるものがある。

彼女は自から女性に對し、吸引力があり、又た女性から吸引された。彼女は女子の體格と、男子の心意氣との持主であつた。最初には其の家婢と戀した。次には其の附近の小成金の妻、曾て米國にて女優であつた一女子と相ひ愛した。

此の愛の葛藤は、或る事件を惹起し、遂ひに彼女をして其家を立ち退くに至らしめた。彼女は貴族の一人娘にして、父の鍾愛したるもの。父の逝くや、其の遺言狀にて、多大の遺産を相続したれば、世界の何處に、如何様なる生活をなすも、それに何等の妨げはなかつた。



彼女は巴里に赴き、其の處女作の小説は一躍彼女をして、巴里文藝、社交界の立者たらしめた。然も彼女の不可解なる性の謎は、恒に彼女に付き纏うてゐた。

三

近時の小説として、此書も例によりて世界大戦を取り入れてゐる。彼女は従軍した。而して彼女の素養は、彼女をして十二分に、其の働らきを戦場に於ける赤字事業に於て做さしめた。

然も亦た此れと同時に、彼女は軍用自働車運轉手の少女メリーと戀に落ちた。それが餘りに他の目につきたるため、此處も不首尾とならんとしたが、休戦の沙汰となりて、此の二個の女性に相携へて、巴里に還り。爾來彼女等は宛も夫婦の如

く同棲した。而してステーションの有餘る資産に任せて、隨意隨處に行樂の旅行及び生活をした。然もステーションの性の謎は、隨處に彼女に魔鬼の如く、付き纏うて居た。

歡樂極りて哀情多し。メリーは、偶然にもマーテンなる男性を見て、相ひ悦ぶの情を催した。然もそのマーテンは、ステーションが其の故郷にあるの日、互ひに相ひ愛し、其極、同人より結婚の申込を受け、猛然として自個が純粹の女子でなさに想到して、之を拒否し。マーテンは、其の斯る曲折を知る由もなく、之を大なる侮辱として、遠く海外に去つた者だ。

此の如く一個の少女は、今や曾て互に相愛したる男女の間に於ける競争の對象となつて來た。ステーション少女を専らにせん乎、將たマーテン少女を専らにせん乎、



此の兩人は決して陰險なる戀の戦争を屑としなかつた。然も少女は情に於てはマーテンに傾きたるも、情と義理とに於ては、ステーションより離るゝ能はなかつた。

ステーションは、此の如くして戀の勝利者となつた。

萬事休す。御身は予に打勝つた。御身達の契合は、餘りに強かつた。(とても予の手にはおへない)

斯くマーテンを白状せしめた。

然もステーションは此の勝利を獨享するに不安であつた。如何にメリーの愛を專にせんとするも、彼女は自ら性の缺陷を自覺せざるを得なかつた。斯くて此の葛藤を切斷する、唯一の方法は、自ら去るにあるを悟り、飄然として去つた。其の

去るや何處。唯だ神之を知るのみ。

以上は極めてあら擧みに、其筋を語りたるもの。小説としては、前にも陳べたる通り、別段面白くはない。但だ發端ステーションと、其父サー・フリップ・ゴルドンとの相愛相憐の情味を描く部分は、如何にも精彩があり、生氣がある。其餘は唯だ豫じめ筋書を作りて、是れを文句もて發展し、意匠もて布衍したるに過ぎない。

然も如何にも眞面目腐りて、殆んど通讀の氣持は、上下つけて御能拜見とでも云ふ可き程である。寧ろ讀んで肩の凝る小説である。之を不倫の書として、絶板せしむるが如きは、徒らに此書を官費廣告するの類であらう。

(昭和四年五月)



『世界大戦後日譚』(The World Crisis The Aftermath) を讀む

一 著者其人に就て

凡そ世界著名なる戦争を記すには必らず一大手筆がある。ゴール戦争には、ケーザルあり。希臘波斯戦争には、ヘロドトスあり。スバ尔多アテネ戦争には、ツキヂデスあり。秦楚の戦争には、司馬遷あり、近くは我が川中島合戦には、頼山陽あるが如し。而して最近の世界大戦に至りては、是れ實に振古未曾有の大事件にして、之を記すには、亦たそれに相應する大手筆があらねばならない。

所謂る世界文學なるものは、寡聞なる記者の知り得る限りにも、枚擧に違がない。

されど多くは記録の類にあらざれば、報告に過ぎず。然らざれば一種のプロバガンダの類にして、所謂る大手筆と云ふ可きものは、殆ど見出さない。而して獨り此中に於て、百獸中獅子吼を聴くが如き感あるは、チャチール氏の名著『世界の危機』(The World Crisis) である。

チャチール氏は、近くはヴィクトリア朝下半期の政治的鬼才、ランドルフ・チャチール卿を父とし、遠くはアン女皇の時代に於ける名將マルホロー公を祖とす。王公將相寧ろ種あらんやと云ふも、彼の血管には、凡有る才力、凡有る器能、凡有る野心、凡有る活力が、洪水を漲らしてあるもの、決して不自然ではあるまい。

彼は少壯にして、身を軍隊に投じ、偽聖退治のオムターマン役に従ひ、南阿戦争にも、捕虜となりて、九死一生の下に脱奔した。而して其間ペンを握りて、軍事



通信員ともなり、其の文名は、冒險戦士の名と與に、當代の話柄となつた。

然も彼の志は政治にあつた。やがて其の傳統的の保守黨議員として、下院に列したが。黨内に於ける自由保護貿易論の葛藤に際し、彼は自由貿易主義を固執して、昂々然として席を自由黨に移した。

自由黨は此の敵側からの來投者を降伏者として取扱はず、來賓として待遇した。而して直に植民地省政務次官に出身し、累進して内務大臣となり、世界大戦爆發の際、實に海軍大臣であつた。而して當時の英國海軍が、開戦に際して機宜を失はなかつたのは、艦隊操練の爲めに、集合せしめたる艦隊を、彼が先見もて、之を分散せしめなかつた爲めと云はねばならぬ。

世界大戦中、彼は一たび失意の人となつたが、やがて軍需大臣となり、而して次には陸軍大臣となりて、戦後軍隊の引上げ、及び軍隊解散の善後策に従事した。

然も彼は自由黨が内訌の爲めに爲す可らざるを見るや、再び黨籍を保守黨に轉じた。而して保守黨は、半は畏惡しながらも、彼を上賓の禮もて迎へ、やがてポールドウイン内閣の大藏大臣として、去る五月同内閣の更迭まで、一九二四年十一月以來、平凡なる同内閣に於て、最も非凡なる色彩を發揮した。

## 二 著者と著作

彼は單に文士のみではない。兵を談じ、政を談じ、美術を談じ、音楽を談ず。彼は大銀行の總裁でも、大ホテルの支配人でも、海陸軍の參謀總長でも、大新聞の



社長でも、向ふ所可ならざるはない。彼は素人畫家として、既に玄人の域に進んでゐる。彼は煉瓦積みれんがづみの技わざに於て、其の同業組合加入者の資格しかくを持つてゐる。世には萬能餘りて、一心足らずと云ふ言がある。彼は果して然る乎、然らざる乎。此丈これだけが問題だ。されど彼は決して虚才きよさいではない、彼は實能の士だ。彼は決して口ばかりの男ではない。其の腕前は、口以上だ。但だ若し彼に缺る所ありとせば、信用である。重厚性ちゆうこうせいである、徳器とくきである。

彼の大著『世界の危機』は、筆を一九一一年から起してゐる。即ち彼が海軍大臣の重任じゆうじんに膺りたる時からである。而して其の第一卷は、一九一五年に至りてゐる。第二卷は一九一五年、而して第三卷、第四卷は、一九一六年—一九一八年に至りてゐる。以上四冊にて世界大戦の始中終を叙してゐる。而して最後に出で來つたのは、實に『後日譚』である。

これは休戦後四個年に亘りて、英國を中心として、世界各方面に於ける出來事、及び大戦の一切勘定を記してゐる。彼は曰く、「此の四個年ほど、未だ曾て多く忘れられ、少く了解せられたる時代はない」と。乃ちその爲めに彼は世界大戦を叙し來りたる淋漓たる大筆を揮うて、更らに此の一卷を書き加へたのだ。されば所謂強弩の末にて、筆勢も萎靡不振に陥るが、當然の順序であるが、事實は之を裏切りて、更らに光焰萬丈の氣魄を紙表に發現してゐる。

若し此書の詳評を掲げんとせば、其の原著ほどの量たらざるも、少くも其の量の半を費さねばならぬ。何となれば此の『後日譚』は、戦後に於る凡有る世界の隅から隅に至る問題に觸れてゐるからだ。



是れ頗る危険千萬なる仕事だ。諸葛孔明は、『讀書觀其大略』と云つた。此れが讀書の妙諦であるか否かは姑らく措き、書籍を評する者に取りては、最好の教訓だ。されば吾人は其の大略を觀て、已む可きであらう。

### 三 二十世紀のマコーレー

『後日譚』に於て、最も面白い場面は、何と云うてもヴェルサイユ會議前後である。チャーチル氏は、故米國大統領ウィルソン氏に對しては、頗る不満だ。然も彼は陽はに彼を攻撃しないが、此の高慢なる學窮的政治家の没分曉漢であることは、其の微言冷語の中に、殆んど完膚なき迄にやりつけてゐる。

彼は又た多年其の政友とし、且つ首領と仰ぎたるロイド・ジョージ氏に就ても、

政見の不徹底にして、且つ其の英國對世界政策の機宜を失したることを痛恨してゐる。

彼は露國をして勞農政府の手に一任せしむるに到りたるを以て、協商國側の責任であるかの如く論じてゐる。彼等が對露政策に就て、半上落下の態度が、遂に間接に勞農政府をして、其の手を隨意に伸ばさしむるに至りたるを長嘆してゐる。而して英米の海權問題に就て相ひ乖離するところ、英佛の對獨問題に就て、利害相ひ反するところ。而して土耳其及び小亞細亞問題に就て、英佛兩國の間に、動もすれば協調が缺けつゝあるところ。而して對希臘政策に就て、英國が殆ど孤立とならんとする危険に瀕したるところなど。宛も指紋を數ふるが如く、明快に語りてゐる。



然も『後日譚』に於て、若し文章の尤も勝りたる場所を求めば、愛蘭自由共和國設立に至る迄の成行であらう。此れは直接著者が其の舞臺の重なる働き役者の一人であつた爲めに、更らに文字に生氣潑刺たるものがある。特に愛蘭側に於ける諸首領を叙する畫像は、何れも巨筆一掃、眞にグリフィスや、コリンス輩をして、紙上に活躍せしむる概がある。

著者のボルセヴィキに於ける、宛も赤毛布の牛に於ける如し。著者は社會黨退治を以て、其の現今の使命と心得てゐる程であれば、斯くあるも、決して意外ではない。されど其のレニン其人の肖像に至りては、何人が之を描くも、著者以上に**出づることは難からう。**

評者は著者を目して、第二十世紀のマコーレーと云ふ。されど典雅に於ては、著

者摩卿に及ばず。然も俊逸に於ては之に邁ぐ。著者は能く大を用ふるに巧であるが、小を用ふるは更らに巧だ。著者は能く百里を飛ぶの巨礮を使用するが、三歩の間に血を見る短劍を、更らに能く使用する。

若し本書及び兩書を通じての缺點を指摘せば、何れの場面にも、著者が中心として動くことだ。而して時としては餘りに自己釋明、自己辯護が過ぎてゐる。されど著者に向て、ツキデデスの精嚴なる公平は、とても望む可きではない。

但だ何れにしても現代玩具人形の縦横する文界に、斯る巨双天を摩するの大手筆を見るは、吾人が斯文の爲めに、聊か意を強うするところである。

(昭和四年十月)



後藤新平伯

わが日本帝國は、後藤伯爵の薨去によりて、多くの陷缺を覺えた。いはゞこれがために淋しくなつた。その程度、その意味において、大隈侯の歸幽の時と、同一とはいはざるも、やゝこれに類似した。

後藤伯は、維新以來東北が産したる俊秀の一であつた。或は奇男兒といふべく、或は快男兒といふべし。然も伯の本領は單に一匹の男を、世の中に賣り出したるばかりではなかつた。伯は實に何よりも天下國家を先務とする公人であり、且つ志士であつた。政界における成功は、かれにおいては決して最初の企畫でもなく、最終の目的でもなかつた。かれはたゞその經綸を行つて、以て君國に酬いんとす



るにあつた。

後藤伯は自から運命の製造者だ。然も伯はその運命を製造すべき總てといはざるも、多くの資格を具備した。その容貌は秀麗であつた。その意氣は俊逸であつた。その言動は快活であつた。然も見掛け以上の機略もあり、妥協性もあり、變應の才もあつた。かくの如くしてかれは水澤縣の少年一給仕よりして、隨處にその援護者、同情者を得た。阿川尙、安場保和、長與專齋の名は、伯の中年までの出身について、最も記憶すべきであらう。しかして兒玉伯、桂公、西郷侯、伊藤公、山縣公の如きは、中年以後において、また最も記憶すべきであらう。

後藤伯は、愛知縣一病院長として、實に明治十五年岐阜において、刺客の難にかかりたる、板垣伯の瘡を療した。しかして當時二十六歳の壯年院長は、尋常一様

の醫師でなき印象を板垣伯に與へた。人を醫するの職業より轉じて、國を醫する政治家となりたるもの、わが國にも橋本左内、久坂玄瑞の徒あり、佛國においては、クレマンソーあり。伯にして政治家たるは、決して異とするに足らず。吾人はむしろ伯が醫師としての素養を、能く政治家たる資格に應用したるを嘉みし、かつ嘆せねばならぬ。

後藤伯は衛生局長として内務行政官中の明星であつた。然もいはゆる相馬事件のために失脚した。吾人は今こゝにその委曲を語る必要がない。たゞ如何に割引きしても過を見て仁を知るものといふべきであらう。乃ち伯の義憤が爆發して、こゝに至りたるもの、伯の伯たるゆゑん、こゝにおいて見るべきだ。

艱難はその人を玉にした。伯はやがて風雲に乗じて擡頭した。そは二十七八年戦



役であつた。この際において伯をしてその驥足を伸ばさしめたる中に、吾人は石黒老子爵の名を想起せねばならぬ。されど伯をして一代の事功をなさしめたるものは、實に兒玉伯その人だ。若し兒玉伯微りせば、後藤伯の臺灣における成功は不可能であり、假令不可能ならざるも、恐らくはその四分の一にも上らなかつたであらう。然もその信用は、決して兒玉伯のみに歸すべきではない。兒玉伯は能く後藤伯を用ひたが、後藤伯はまたよく兒玉伯に用ひられた。

後藤伯は固より悍馬だ。到底平凡の御者の手にはをへない。されどこの悍馬はよく御者の能と不能とを鑑別する明を持つてゐた。この悍馬は決して何時でも、どこでも、また何人に向つても、喰つてかゝり、噛み付き、若しくは蹴るものではなかつた。しかして伯と最も相得たる者、前に兒玉伯あり、後に桂公あり。しかして伊勝公の如きも、またその伯樂たる一であつた。

後藤伯は決して偉大なる立法家でもなく、また練達なる行政者でもなく、また黨魁でもなく、煽動政治家でもない、しかしてまた世のいはゆる策士の徒でもない。後藤伯には自から後藤流なる一家の風があつた。かれの頭腦は曇り水晶の如く、その透明の部分と、不透明の部分とあつた。桂公が後藤の進言十中、その取る可きものは、僅に二三、然もそれは實に意想外の明案であるというたのは、尤も伯の長短を盡したる評言であらう。

後藤伯は自から座元となりて、一座を組織すべき人であつた乎。はた大なる座元の花役者たる可きであつた乎。吾人は寧ろ後者であつたと思ふ。されど伯は必ずしも理想的の組合員ではなかつた。仲間の折合は必ずしも圓滿ではなかつた。但だ兒玉伯や桂公の如き巧妙にして且つ有力なる座元ありて、能く按排調停したる



がために、その破綻を示さなかつた。

桂公去りて以來、伯は寺内内閣、山本内閣等にも列した。然も伯の施設は、臺灣以外では、滿鐵であり。滿鐵以外では、先づ内地における鐵道であり。然もその晩年は純正政治よりも、むしろ社會人として、或は都市の自治、對露政策、或は倫理化運動、或は少年團等において、發揮せられた。しかしその中において、伯の對露政策は、少くともその事の一半は、當局者の採用する所となり、これがために昨年の御大典には昇爵の恩命を拜するに至つた。然も伯の志は、西伯利方面に向て、大なる日本の植民地を開くにあつた。この宿志の酬いられなかつたことは、伯に取りても、將たわが國においても、多大の遺憾といはねばならぬ。

いはゆる大調査機關設置説は、伯が大戦後歐洲視察の御土産案にして、原、兩加

藤など、歴代の首相は、屢々この獻策に惱まされた様だ。吾人はこの事の得失を論せんとするではないが、如何に伯が調査に重きを置きつゝ、あつたかは、これにて知るべしだ。伯は要するに日本の志士風に、獨逸の科學的研究を加味したるものにして、伯のいはゆる一家の風は、職としてこゝに存した。

伯は必ずしも、隨喜者のみにて圍繞せられなかつた。伯を愛する者、もとより多し。伯を好まざる者もまた少くなかつた。しかして伯の言行は時々放恣にして、或は他の好感情のみを挑發したとは思へない。されど伯には一種の天真爛漫たる稚氣ありて、それが却て伯を世の中と調和せしめ、社會と繋るゆゑとなつた。伯の發病以前、その少年團員の望みに任せ、故らに大禮服を着けて、かれ等を檢閲したりといふが如きは、その事小なるも、亦た以て伯の眞面目を知るに足る。



一切を乗除するも、伯の志は天下にあつた。惟ふに伯は日本、獨逸、露西亞の三國を提携せしめ、以て卅七八年後後の世界政局、少くとも東亞政局を料理せんと欲し、これがために桂公と相拉へて、露都訪問に出掛けたものであつた。しかも明治天皇の御大故のため、倉皇桂公一行の歸朝となり、遂にその事も晝餅となり、世界大戰の勃發を餘儀なくせしめた。吾人はこゝにおいて後藤伯の志を悲しむと與に、また桂公の志を悲しむ。

(昭和四年四月十四日)

### 後藤子の新運動

後藤子には、多少の缺點ありとするも、自から天下の士を以て任ずる一人だ。經世家として十分の及第點があるや、否やは、見る人の批判に任せ、少くとも自ら

經世家を以て任ずる一人だ。されば後藤子が今回の蹶起には、記者は十分と云ふよりは、寧ろ十二分の同情を表するに遲疑しない。

但だそれが果して賢明の方法である乎、否乎は、聊か惑がある。人或は後藤子が古稀を過ぎて、政治的新運動に従事するを晩しとなす。されど問題は年齢ではな  
 \* \* \* \* \*  
 5。范増は七十にして起ち、太公望は八十にして起つ。虞翁の愛蘭自治案の新運動を起したるは、七十七歳であつた。後藤子にして成さんと欲せば、何ぞ七十と云はぬ、七十七でも可、八十でも亦た不可なし。年齢は問題ではない。

\* \* \* \* \*  
 吾人の遺憾とするは、別に理由がある。若し政治を改良せんとせば、政治の根原たる社會を改良せねばならぬ。そは河川を改良するには、山林の改良を要すると一般だ。されば吾人は後藤子に向て、社會改良の率先者を以て居らんことを、



期待した。別言すれば社會教育家としての努力を期待してゐた。後藤子は政治家としても、當代の一人であらう。されど政治方面には、其の競争者もあり、對抗者もあり、場合によりては反對者も出で来る。されど社會教育家としては、若し天下無敵と云ふ能はずんば、天下一品と云ひ得られないことはない。されば記者は單に私室に於てのみならず、稠人廣座の中に於ても、ゆめ總理大臣などの野心を起さず、國民の先導者として、君國の爲めに盡瘁せられたしと明言した。

惟ふに今回の政治的新運動も、後藤子は政界腐敗の現状を見て、慨然として起ちたるものにして。決して首相たらんとする野心の爲めでもなく、又た政治的權力を掌握せんとする、功名心の爲めでもあるまい。されど如何に後藤子は、自から辯解するも、一たび看板を掲ぐる以上は、無敵の地を去りて、有敵の境内に踏み込む覺悟をせねばなるまい。此れが後藤子の爲めに得平損乎は、別問題として、

國家の爲めに、有用の人物を徒費するの虞なしとする乎。

早稻田老雄去りて以來、世の中は淋しくなつた。頼ひに後藤子ありて、其の若干を償ふを得た。今後と雖も、後藤子は問題の提供者として、尙ほ社會を賑はずであらう。されど後藤子の大風呂敷は、此の新看板の爲めに狭小せらるゝ氣遣なき乎。善にせよ、惡にせよ、大風呂敷は、後藤子の特色であり、本色である。其の勢力は、空氣の如く、流動普遍の點に在す。然るに之を壓搾して、一の固形體を作らんとするは、寧ろ自から感化力を減削する所以ではあるまい乎。

記者は必らずしも新運動に反對する者ではない。但だ平生後藤子に同情者の一人として、茲に杞憂を開陳して措く。然も若し記者の所言が、杞憂に止らば、そは後藤子の爲めに祝す可きのみでなく、天下の爲めに慶賀の至りである。



(大正十五年四月六日)

### 後藤子爵の新著

過日古稀の高齡の故を以て、宮中より銀盃を頂戴したる、子爵後藤新平君は、日本少年團の首長として、カーキ色の制服、制帽にて、寧處に違あらず。頃ろは所澤にて、患者用の飛行機に試乗したりと聞く。世間に老少年の語を聞く、然も君が如きは、老新人と云ふ可きに庶幾し。

君曾て日本膨脹論を著し、民族的、文化的の膨脹を論じ、靈肉一如の説を述ぶ。頃ろ亦た公民讀本三冊を著して、世に公にす。是皆な憂時慨世の餘、經國濟民の志を成さんとするの一端である。

公民讀本著述の主旨は、君の言葉によれば、

余は、國民が國家といふ超個人的全體の下に、専心戮力、統合して活動すると  
 ころに、始めて眞の個人的福利が獲得され、民族的理想の確立を離れて、個人  
 的使命の存立し得ざるの理を了得し、己れ自らの個性を深く強く自覺して、自  
 發的教育に資し、以て奮勵努力、轉禍爲福の方策を樹立することを衷心の希望  
 とする。本書述作の根本趣意は、實にこの外に出でないのである。

既に此にて盡してゐる。今更ら蛇足を加ふ可き餘地がない。然も著者は其の現在の國狀に就て、

我が國民に批判力缺乏し、動もすれば盲目的模倣に陥り易き傾向ある事。  
 國民教育が、國民の實際生活と没交渉となり、且つ一律強制の弊害ある事。

後藤子爵の新著



人類協調を整準とする、世界の趨勢を理解せざる事。

普通選挙に對して、之を公正に且つ有効に遂行するの資格、及び準備が缺乏し  
ゐる事。

大正十二年の大震災火災、即ち此の國家未曾有の大慘害後、未だ國民的自覺、反  
省が充分に行はれてゐざる事。

等に就て、最も慨慷し、遂ひに本書を作したる所以を語りてゐる。

而して本書は之を三卷に分ち、少年の卷、青年の卷、成人の卷とし、順次に其の  
年齢、及び學力に應じて、環狀的に通讀せしむ可く、材料を配置してゐる。其  
の用意、最も周到と云はねばならぬ。

記者は必らずしも好む所に阿りて、之を天下に推薦する者ではない。されど古人

は『燒盡人間無用書』と云うたが、如何なる苛酷なる批評家出て來りても、之を  
人間無用書と云ひ得るものはあるまい。

記者は此書に就て、一言すると同時に、著者其人に就ても一言したい。日本に於  
て早稻田老公去りて以來、日本を世界的に代表する人士は、甚だ寂寥。只だ其中  
に於て、後勁たる可きは、著者其人であらう。日常手から口への黨派政治の如きは、  
之を他人に一任して可也。著者は須らく其の自から天職と信ずる所に向て、  
幕進し、國民の先導者たるを勗めよ。

(大正十五年二月二日)

# 野田大塊

野田大塊



明治大正の時代に於て、若し平民主義大勝利の象徴を、個人に求めば、野田大塊を以て、先づ其の第一人者とせねばなるまい。彼は實に門閥や、格式や、習慣や、階級や、凡有る障礙を乗り超え、打ち破りて、世に出で、世に立ち、世に用ひられ、世の爲めに働らきたる一人であつた。是れ固より時代的精神の然らしめたるものなれば、彼一人に止らない。されど彼は其中に於ての、最も著明なる標本と云はねばならぬ。

彼は實に社會の下層より出で來つた。其の世間の壓制に對する反抗的精神は、中に燃えた。彼が少壯にして、自由民權の説に與みしたるは、固より當然だ。然も彼は當初より、事理を抽象的に考察する漢ではなかつた。彼の腦底には、恒に具體的の或物が宿つてゐた。是れ彼が自由民權論者でありつゝも、他の空理空論者と趣を殊にしたる所以。

艱苦は良師友、世界は大學校とは、正しく彼に於て之を見た。彼は隨處に、主と作るの作用を心得てゐた。其の三池に在るや、一郡の有志者であつた。其の福岡縣に在るや、一縣の有志者であつた。而してやがて九州の代表的有志者となり、而して進んで天下の有志者となつた。彼は徐ろに歩いた。されど其の最上の階段まで上るを忘れなかつた。遅々たる牛歩は、何時の間にか、政友會の領袖の一人たらしめ、臺閣の大臣たらしめ、朝野に於ける、一個の動かし難き定石たらしむるに至つた。

彼が中央舞臺に顔を出し、名を成したるは、政治家としてよりも、寧ろ實業家としてであつた。彼が三池に紡績會社を、其の同志者と創立するや。乍ち日本に於ける斯業者の牛耳を取る一人となつた。然も實業家として止まるは、彼の目的で



はなかつた。彼は遂に殆んど全く其の全心、全力を、政治に投没するに至つた。而して其の明治大正の政治に、幾許の貢献をなしたる乎は、知る人ぞ知る。伊藤、山縣、松方、井上の諸老、何れも皆な—其の差等はある可きも—之を知つてゐた。而して桂、原の兩政治家に至りては、最も多く最も善く之を知つてゐた。今日に於ても西園寺老公の如きは、必らず之を識認してゐるであらう。

彼は伊藤公に知られ、最も井上侯に知られた。彼は何人に對しても、其の言はんと欲する所を言うて憚らず。而して之を聴く者も、殊に彼の言として善く之を容れ、縦令容れざるも、之を瞋り、之を斥くるに忍び難きものあつた。彼には戦鬪力もあり、破壊力もあつた。然も其の特色は、明治大正の間を通じて、大なる妥協者であり、且つ最も成功せる妥協者の一人であつた。彼は實に策士の看板を掛けざる大策士であつた。

但だ彼が他の策士と同じからざるは、策の爲めの策でなく、其の經綸を行はんが爲めの策であつた。彼は黨人であれば、固より黨流を無視しなかつた。されど國家の前には、自個も自黨も無かつた。全く無かつたと云はざる迄も、殆んど無かつた。彼は實業家出身であり、平和主義者であつたが、然も健全なる意味の、帝國主義者であつた。即ち内に於ては自由民権、外に向ては國勢伸張、而して之を一貫するに、皇室中心主義を以てした。唯だ此の一事は、本文の記者と、彼と始終一貫、相ひ渝らなかつた。

彼の死せんとするや、一言の家事に及ぶなく、唯だ皇室中心主義を以て、舉國一致、大いに國勢を張る可しと遺言した。彼は死に抵る迄、日本男兒の眞骨頭を把持してゐた。彼は未だ曾て志士を以て、自から標榜せず、然も徹上徹下、志士



の常操を堅持した。

彼は外に僧夫の面目を備へて、内に張良、陳平の奇智を寓した。俚語に『大男  
總身に智慧が廻りかね』と云ふも、彼の堂々たる巨軀には、それが横溢してゐた。  
而して外は粗大簡放の如くして、内は實に縝密細心であつた。但だ彼は樸を以て  
巧を掩うた。大巧拙なるが如しとは、それ唯だ彼に於て之を見る。

彼は身臺閣に列したるも、遂ひに野人の風采を脱しなかつた。實業に入りて、實  
業臭なく。禪を學んで、禪臭なく。黨に入りて、黨臭なく。頂天立地、只だ一個  
の野田大塊であつた。彼にして若し利に専らならば、彼は富者たることも難くな  
かつた。彼にして若し世間的名譽に執著せば、尙ほより好き獲物があつたかも知  
れない。されど彼は取るよりも與るを好み、名聞よりも實行を好んだ。而して此

處に大塊の大塊たる大本領が存してゐた。彼は死する前數日、記者の手を把りて  
曰く、最早爲すだけの事を爲した、もうだめだと。日本は彼に於て、實に一個の  
大なる子供を喪うた。

(昭和二年二月廿三日午前九時、大森山王草堂に於て、彼の永眠後四時間)

### 大塊小祥忌

月日のたつのは早きもの。

昭和三年三月二十一日(秋季皇靈祭日)は、野田大塊の小祥忌を、鎌倉山の内東  
慶寺に於て營むこととなつた。

大塊小祥忌



予は妻と共に、熱海から朝の汽車に乗つた。車中には元田國東翁が在つた。此れも目的は同じこと、大船にて下車すれば、東京からの諸君、及び益田翁等の一行と出會した。益田翁等は恐らく小田原からであらう。

東慶寺の石燈を上げれば、人の山を築いてゐる。俊作君、秀助君、松野君、其他野田家一統の人々、及び名譽幹事の阿部無佛、石井積翠、其他諸君も周旋尤も勤めてゐる。

群賢畢至、少長咸集、全く蘭亭記其儘の文句通りだ。實業家の巨頭もあれば、政黨屋の親玉もある。大浪人の隊長もあれば、徹の生えたる新聞記者（夫子自道也）もある。而して少壯有爲の連中も亦た少くない。今更らながら大塊の大塊たる所以が偲ばるゝ。

清齋は、禪忠和尚の肝煎にて、何れも舌鼓を鳴らした。讀經も型の如く了り。田中首相、益田翁、頭山翁、犬養翁、團翁、其他何れも焼香した。座中何れも名流ならざるなし。誰を誰と特記す可き様もない。但だ餘りに來會者が多くて、幹事達も、豫算が狂ひ、聊か面喰うたる氣味ありげに見えた。

風は勁かつたが、春日は温麗であつた。我等は芳草を踏み分け、寺の背面なる竹藪を貫き、其の開山塔や、宗演老師塔の側に、別に一區を拓き、自然石の不得要領的に横はりたるを見出した。此れが大塊の分骨處だ。其側に墓誌石がある。此れが予が撰且書したるもの。今更ら慚惶に禁へない。然も予に於ては、最善を竭したるもの。故人靈あらば、『ヨカタイ』を連發するであらう。

野田家一統は、何れも大塊の志を守り、各自其の主とする所に向て、奉公の業



を勤む。而して長男俊作君、及び長女婿松野君、何れも代議士に當選す。一門二人の選良を出す。積善の家、餘慶あるもの歟。

(昭和三年三月二十三日)

### 河野廣中翁

河野廣中翁逝く。

翁は戊辰の役に於て、三春の少壯志王として、結髮東北に於ける勤王の軍に従うた。爾來翁が國會請願に於ける、福島事件に於ける、其の民間志士の典型として、明治、大正の間、始終を一貫し、以て今日に至りたるは、吾人が改めて特筆する迄もなし。

本文の記者は、未だ二十歳に満たざる以前より、翁を識れり。翁は當時自由黨の幹部の一人として、記者は九州の田舎書生として。爾來相見する毎に、翁は屢ば當時に言及せり。古人の句に云く、「志士凄凉閑處老。名花寥落雨中看。」と。今や翁の如き志士を亡ふ。江湖翁の爲めに、一掬の涙を揮ふ者、單に翁の故舊、及び同郷の子弟に止らざる也。(大正十二年十二月三十一日)

### 水野直子を惜しむ

貴族院の名物男、水野直子逝く、享年五十一と云へば、當今では若死だ。惜しむ可き夫。

水野直子が、貴族院と云はんよりも、一般政界に於ける、その政的生涯は功罪何れが多き乎、觀察者の立場次第にて、其の評價に異同有る可きは當然だ。

有體に云へば、子には政治家的抱負も無く、經綸も無く、主義も無く、主張も無く、剩す所は唯だ情實一點張りの奔走家たるに過ぎなかつた。

水野直子を惜しむ



而して子は復た陰謀が何よりの好物であつた。ウイルソンの懐刀であつたハウ  
X氏は、性來喧嘩の仲裁が好物であつた爲め、故らに友達共の間に、喧嘩を製造  
して、それが仲直り役をつとめたと云ふが、水野直子にも、やゝ此に類するもの  
が、無いでも無かつた。

子は鼠の如く、其の動作が、人に見らるゝを好まなかつた。深夜の訪問、裏門の  
出入、而して兎には三窟ありと云ふが、子にはそれ以上の秘窟があつた。奇と云  
へば奇、怪と云へば怪。

子は政治家では無かつた。何んぞ況んや經世家をやだ。然も多量なる政治家的素  
質の持主であつた。そは人を丸め込む手管、排難釋紛の手腕、四角の物を丸く纏  
むる手際、何れも鮮かなものであつた。

然もそれよりも子に取る可きは、己の爲めにせず、人の爲めにしたる一點だ。此  
の一點が、子の同族間、若くは同人間に重きを爲したる所以であらう。而して子  
は如何なる勞苦を做すも、己の爲めに、其の勘定書を、對手者に突きつけるが如  
きことを屑としなかつた。子は無報酬を以て、最も大なる報酬と心得てゐた。

若し子に理想ありとせば、そは恐らくは今後に於ける華族—少くとも餘りに富裕  
ならざる華族—の爲めに、其の安全地帯を作らんとするにあつたであらう。そは  
兎も角も、子の行藏に就ては、是非の論あるも、子が己が一身の爲めせざりし一  
事は、子の美德として、何人も之を識認するに遲疑せぬであらう。

水野子は學者でもなく、識者でもないが、世に處する智と、其智を行る精力と練

水野直子を惜しむ



達とは、有り餘る程あつた。但だそれよりも不思議なるは、子が一種の靈的信者であつたことだ。子は單に自動の人でなく、或る不可思議力に支配せられてゐるかの如き心持の人であつた。此れが凡有る子の性格と行動とに、他人と比擬し易からざる色彩と音調とを賦與した。

子の政界に於ける功罪の論は、姑らく措き、兎に角華族仲間には、特色ある一人であつた。然も其の特色は他人の容易に企て及ぶ所ではなかつた。

(昭和四年五月一日)

### 加藤首相を悼む

加藤首相の俄然たる長逝は、如何にも痛嘆する、單に彼人に向て同情を表する許りでなく、憲政會に向ても、笑止千萬の事と思ふ。實に世の中の事は、寸前暗黒だ。

併し本文の記者には、意外ではなかつた。記者は天眼通ではない、されど去年の暮、貴族院玄關口にて、一たび彼を見、本年本月廿一日、貴族院壇上に於て、再び彼を見、其の健康の尋常ならざるを察し、窃かに危惧の念を、社友に漏らした。其の理由は姑らく語らざるも、斯く直覺したと云へば足りなむ。

加藤子は萬延元年の生れなれば、數へ年では六十七歳だ。即今の如き政治家晩成の世の中では、其の前途決して短しと云ふ可きでない。特に雌伏十年の後なれば、せめて今後一生一代の大仕事をなして、君國に酬ゆ可きであつた。

然るに昨年八月、單獨内閣の首班として、始めて醇なる憲政會内閣を組織して、

加藤首相を悼む



未だ半歳を経ず、未だ一議會を了せずして逝く。其の痛恨や知る可し。況んや其の與黨諸氏に於てをや。彼等十年の辛酸を嘗め盡したる効果、却て首領の柩を圍んで泣く、眞に運命の神程、惡戯のものはない。

然し偶然にも、彼の後継者は、其の臨時首相代理と云ふ名目の下に、若槻君に定つた。此れは憲政會から云へば、洵に仕合である。若槻君は必ず此の急變に對して、善處するものあらむ。

今日に於て加藤子の功過表を掲ぐるは、大早計だ。然も彼は如何なる缺點あるも堅實なる政治家であり、眞面目なる政治家であつた。

本文の記者の如きは、必ずしも彼の味方でもなく、崇拜者でもなく、固より加藤

宗の信者でもない。されど記者は加藤子を以て日本に於ける健全なる政治家と認め、其の政治的見識と手腕とは、姑らく論外とするも、彼の存在を以て、國家の信用を成す所以の一と許してゐた。然るに今や其人を喪ふ。如何にも痛悼に禁へない。

併し往者追ふ可からず。只だ憲政會の諸君は、此際如何なる方策を以て、此の急變に應ずる乎。それが吾人の尤も關心する所だ。憲政會の大を成すも、此れからだ。而して其の一挫復た振はざるも、此からだ。諸君徐ろに商量せよ。

(大正十五年一月二十九日)

### 李王殿下の薨去

歴史は流水の如し。總ての事物を蕩漾し去りつゝあり。乃ち李王殿下の薨去の如

李王殿下の薨去



きも、亦た其の近き實物教訓の一であらう。

李王家に對する、我が朝廷の御殊遇は、實に明治天皇の巍々蕩々たる、聖徳の光明を發したる一端として、我も人も實に感激に勝へざるものがある。而して此の大御心の冥々の裏に、李王殿下の胸奥に徹底したことは、李王殿下の態度は極めて自然に、極めて妥當に、極めて平和に、而して概括して云へば、極めて良好であつたことを以て、之を證明するに餘りある。

李王殿下は、流石の朝鮮半島の陰謀渦中に、成長したるだけありて、随分掛引もあり、表もあれば裏もあり。その爲めに、遂ひに雜輩の爲めに乘せられて、其の終を善くする克はなかつた。之に反して李王殿下は、恒に大勢に順應して、毫も私智を弄せず、而して其の一身のみと云はず、李氏一家を保全して、以て千歳

に血食するもの。是れ所謂の大巧拙なるが如きものではあるまい乎。

李朝五百年の間、御家騒動は一にして足らなかつた。若し日韓合併の事なからしめば、李家の運命は、如何になる可かりし乎。少くとも李王殿下の一身は如何になる可かりし乎。記者は想うて此に到る毎に、實に明治天皇の至仁、至愛の恩澤が、李王一家に渥かつたことを、欽仰せざらんとするも能はず。然も明治天皇の聖徳をして、此に至らしめたるもの、亦た李王殿下の恭謹にして、能く天下の大勢に順應したるを嘉みせねばなるまい。

李王家には更らに王世子垠殿下あり。日本第一のみか、寧ろ世界的大政治家の一と云ふ可き、故伊藤公の薰陶を受け、明治天皇及び今上天皇御殊遇の下に、成人し給ひ、今や親王家中に於ける、優秀の御方の一人として、然も我が皇族中よ

李王殿下の薨去



り妃殿下を得、模範的好家庭を作し給ひつゝあり。此に於てか李王家の前途洋々として、實に海の如きものがある。李王殿下の靈、それ長へに安からん夫。

本文の記者は親しく李王殿下に拜謁し、曾て握手を賜ふの光榮を擔うた。今や殿下の訃音に接し、哀悼に禁へず、竊かに感慨の一斑を叙して、恭しく奉弔の誠を表す。

(大正十五年四月二十八日)

### 侯爵李完用君

一堂李完用君逝く。君が逝くは悼む可し、然も自然の化を以て逝きたるは、君の最後としては、寧ろ仕合と云はねばならぬ。何となれば君は曾て刺客の刃に罹りて、

既に一命を失はんとした。爾來其の危険は、最後迄附き纏うてゐた。

君微りせば、日韓併合の舉は、恐らくは斯く迄、圓滿には行はれなかつたであらう。されば日本の立場から云へば、君は實に殊勳者である。我が朝廷が、君を待つに殊遇を以てし給うたるは、固より當然の事。

朝鮮側から云へば、君を以て賣國の巨魁とし、此れが爲めに、君は屢ば刺客の標的となつた。然も君の心事は、大いに諒とす可きものがある。大局から云へば、當時日韓併合は、避け難き情勢であつた。其の情勢を看取し、彼が如き形式を取りたるは、朝鮮側から見ても、止むを得ざる最善と云はねばならぬ。

吾人は李完用君の日韓併合と、勝海舟先生の江戸城引渡とを、同一視するもの



ではない。亦た兩君を同一の尺度に照して、論ず可きものでもあるまい。されど斯る場合に、斯る事を斷行するは、とても臆病者や、假面的強がり者の能くする所ではない。乃ち此の一點だけは、兩者相同じと云ふも、差支あるまい。

故寺内君魯庵は、容易に人に許さない漢であつた。されど彼は曾て記者に語りて、李完用は、乃公より一目上だと云うた。日韓合併の一幕では、寺内と李とは、双方の大立者だ。然るに寺内の言此の如し。此れは如何に其際に於ける、李完用君の神色を動かさざる沈勇と、鋼鐵の如き意志と、水も漏れざる深謀とを、雄辯に物語るものであらう。

朝鮮人には機略の士は、必ずしも乏しくない。されど李完用君の如き腹黒さ、鹽辛さ、意地強さ—敢て悪きとは云はず—漢は多くあるまい。而して最も彼に多しと

するは、彼が勇氣だ。然もその勇氣や、向ふ見ずの勇氣でなく、向ふを見るの勇氣だ。惟ふに李完用君の勇氣は、理智の結晶より來りたるものに庶幾しと云はん乎。

更らに彼に多しとするは、彼が態度の明白であつたことだ。鼠色は朝鮮人得意の色だ。されど彼は黑白分明であつた。而して一たび其の態度を定むれば、彼は身を以て之に當つた。彼の責任觀念に就ては、必らずしも動機の純なるもの、みとは限るまい。されど彼は少くとも、當てになる政治家であつた。而して當てになる政治家は、今日では我が日本でさへも、饑饉ではない乎。

諺に無くて七僻と云ふ。杜預に左傳の僻あり、和嶠に錢僻あり。君の僻は前者にあらずして、後者にあつた。若し君にして日韓合併の後、赤松子に従て遊ば、君の高風清節は、更らに朝鮮掉尾の第一人たるを得たりしならむ。若し君に於て、

侯爵李完用君



最も惜しむ可きありとせば、只だ此を惜しむ可きのみ。

(大正十五年二月十三日)

### 穂積先生

本年二月二日、加藤首相の葬式を、青山齋場に營むや、穂積樞密院議長は、肅然として、其の棺の側に立つてゐた。當時の光景は、今尙ほ眼中に髣髴してゐる。然るに今や議長亦た、葬送せらるゝ人たらんとは、人生の如露、如電、今更らながら驚かざるを得ない。

穂積先生―議長と云ふよりも、男爵と云ふよりも、先生と云ふが、尤も適當と思ふ―は、學者の典型として、理想的に庶幾かつた。其の學界に貢獻する五十餘年、近來の内閣は、少くも三四人、多きは五六人も、君を先生と呼ぶ閣員があつたと

云ふ。君の社會に於ける鬱然たる勢力、以て想ふ可し。

君は單に學術を以て、自から一世に卓越したるばかりでなく、其の一身を以て、帝國學界の泰斗となり、學者及び一般人材の養成者となつた。君の學風は、英國ヴィクトリヤ中期の學風に、頗る負ふ所のものあつた様だ。君の英國に留學したるは、明治十年前後、即ち一八七〇年代にして、ヴィクトリヤ朝を飾る、名士輩出の際であつた。君やダーウインの自然淘汰説、スペンサーの進化説流行の英國學界に投じ、其の青春の志趣を、此に傾け、茲に君が畢生の大著たる、法律進化論の端緒は定められた。

君は學問に忠實に、研究に縝密に、肯て急かず、肯て息まず。其の法律進化論を著はさんとするや、徐ろに然も確かに、久しく然も堅く、孜孜、兀々として、其



の完成を、一生の事業として期した。然るに其の資料既に整齊し、漸く其功を竣らんとするの中途に於て斃れたるは、獨り君一個の遺憾ではあるまい。然も君の七十餘歳にして、尙ほ老書生たりし風を聞くものは、如何なる惰夫も亦た志を立てるものあらむ。

記者は君の志の學問に専らなるを知つてゐた。樞府副議長となる、決して其の本志ではなかつた。況んや其の議長となるに於てをや。君は極力固辭した。然も其上之を固辭するは、公人としての責任回避の虞あるを自覺し。所謂「已むに已まれぬ大和魂」もて、即ち犠牲的精神をもて、其の運命に一身を委ねた。世人或は君の爲めに、其の榮任を賀したるも、其の裏面には、一掬の涙があつた。

君の學風は、寔事求是、穩健、著實、敢て虛無高遠の奇説を選ばず。其の具

統は、或は古代法律の著者、サー・ヘンリー・メインに類するものがあつたかと思はる。但だ其の論鋒銳利、快劍陣を研るの概あるは、乃弟八束君の長所にして。君は局部に於て、勝利を争はず、堂々として大家の風があつた。されば縱令君の結論には、承服し難きものありとするも、其の堂々たる態度は、敬服に餘りあるものがあつた。君の學殖の廣博は勿論であるが、それよりも其の篤學的、研究的態度は、更らに敬重に値ひした。

君の功勞は、短文の能く言ひ盡す所でない。但だ記者の君に就て印象深き、或る點を掲げて、恭しく茲に弔意を表しく措く。

(大正十五年四月十日)

## 大倉鶴彦翁

大倉鶴彦翁



實業界の快男兒

大倉鶴彦翁は、九十二歳にて逝いた。然も其の最後迄、殆んど平生の如くして逝いた。九十餘歳の齡は人生に於て、希有だ。然も九十餘歳にして、翁の如く心身の健全を保持したる者は、殊に希有だ。近き比例は、唯だ澁澤青淵翁に於て之を見るのみ、福壽兼全、翁の生涯や遺憾なきに庶幾し。

翁の一生は、少くとも維新大改革の時代より明治、大正、昭和にかけての活歴史の數頁である。其の徒手空拳十八歳にして、北越の故郷を出で、八十八歳にして、其の業務を、後繼者に譲る迄、殆ど是れ奮闘の生活だ。然も其の退隱後も、専ら滿蒙及び支那に於ける經營の指導者として、其の餘力を揮うてゐた。古人の斃れ

て而して後止むもの、翁に於て之を見る。

翁の祖父定七君の墓銘は、頼山陽の筆にしたる所、掲げて山陽遺稿に在り。之を讀めば、何となく鶴彦翁其人の面影を見るの心地す。翁は曰く、祖父は當時八幡船に關係を持つてゐた。其の外品私販に際して、仲間に論争あれば、祖父一言にして之を裁定したと、山陽の文中には明記せざるも、大倉氏の血管には、冒險、大膽、而して傍若無人の血液が流れてゐる様だ。

翁の今日を爲すに就ては、決して其の仕事に無理が無かつたとは云はれまい。商機を見るに敏にして、之を攫むに無遠慮なる彼は、其の目的の爲めに、手段を擇むの餘裕無かつたこともあらう。併し翁は若し逆取したることあつたとしても、能く順守した。能く財を集めたが、亦た能く財を散じた。



翁に俠骨ありと云ふは、或は妥當であるまい。俠は己を忘るゝを云ふ。然も翁は未だ片時も己を忘れ無つた、打算を忘れ無つた。されど翁は決して守銭奴ではなかつた。翁は誰よりも金銭の價値を解したが、その之を解したるが爲めに、更に之を善用した。翁の公共事業に投じたる金銭は、前後通じて二千餘萬圓に上りたりと云ふ。而して其の東京、大阪、京城等に於ける翁の設立したる學校の卒業生は、殆ど一萬人に上らんとすと云ふ。此だけでも以て稱するに足るものがある。

翁に就ては、予既に大正十三年其の米壽の祝宴に際し、之を語つた。而して其の大意は、翁の傳記の序文として掲げてある。今茲に之を繰り返す必要はない。但だ米壽祝宴以來、八十九歳にして、蒙古の奥地に遊び。九十歳にして赤石山の絶頂に上り。九十一歳にして朝鮮の金剛山を跋涉し。其の隣邦に於ける事業の經營も、愈よ倍々進行しつゝあつた。而して翁の晩年は、其の短所、缺點は、過去に葬り去られ、其の美點、長所のみ世に昭著となつて來た。乃ち翁の老境は寧ろ淨化せられつゝあつた。

翁は平生士君子と共に交るを好んだ。大久保甲東、木戸松菊、之を近くしては伊藤、山縣の兩巨頭の如き、能く翁を近け、翁と遊んだ。而して翁の報國の丹心は、諸公固より之を諒としたであらう。予は一個の老書生、實業家でもなく、政治家でもない。但だ相交る三十年。其の君國に奉仕する一事に於ては、聊か翁と相知り相照するものがあつた。翁は其の遺言狀の證したる如く、公人としては、實に皇室中心主義者であつた。

翁は固より打算者たると同時に、勇者であつた。翁に取る可きは此の勇氣だ。而



して同時に幾片の穉氣があつた。此の穉氣が、能く翁を世間に繋いだ。要するに翁は一切を乗除して、現代の實業界に於ける快男兒であつた。

(昭和三年四月二十八日 鶴彦翁告別式の日)

### 平山成信翁

時代の潮汐は、用捨なく一切の現在を漂はして、過去へ押し流し逝く。我等は平山成信翁の不歸の客となりたるを悼みて、此の感を深且つ切ならしむ。

平山翁は現代に其の比稀なる、殆ど模範的官人であつた。思慮分別ありて、思慮分別臭き顔をせず、佛蘭西學者として、最も舊く且つ更らに新らしき一人にてありながら、漢學にも造詣あり、筆翰に長じ、詩作に秀でたれども、さりとしてハ

イカラ風もなければ、漢學者風もない。而して殊更らに溫良恭謙を装うたる様子もない。看來れば古人の所謂錦を衣て綯を尙ふるものにて、其の渾然たる濃厚の風事は、殆ど天成に幾かつた。

平山翁は明治初期の洋行生にして、其の博覽會其他に於て、日本を歐洲に紹介するのみならず、我が帝國の利用厚生の開導に、其力を效したるは勿論。其の殆ど明治、大正、昭和の三代を一貫する官歴と與に、赤十字社の扶植、存立に功勞多き類。此れ皆な世間周知の事。固より記者の贅辯を俟たない。

但だ翁は故平田西涯伯と、政治上に於ては、殆ど兄弟の誼あり、其の政治方面に於ける冥々の報効は、恐らくは天下之を知る者多くあるまい。然も之を天下に廣告するは、決して翁の志ではなかつた。但だ今日に於ては、吾人は之を默過す



可らざる義務がある。

翁の先人省齋君は、幕府末期に於ける、俊材の一人であつた。夙に岩瀬鷗所に知られ、其下に於て、最も力を効した。鷗所は則ち岩瀬肥後守である。何人も幕末史を讀むもの、初に平山謙二郎、後に平山圖書頭を知らぬものはあるまい。翁や其の先人の遺績を紹述するに於て、最も其心を盡した。記者の如きも亦た翁の手より其の遺著を頒與せられたる一人だ。

記者が即今執筆中の『近世日本國民史』には、徒目付平山謙二郎の名が、屢ば散見しつゝある。記者は成信翁存在によりて、何となく當時の歴史と接觸するの感をなしつゝあつた。今や翁を喪うて、轉た其の針線斷絶の嘆に堪へざらしむ。嗟呼悲哉。

(昭和四年九月二十七日)

### 舊友を喪うたる嘆

#### 宮島眞之君に就て

老の至るは致方がない。されど老と俱に舊友の亡くなるのは、實に大なる痛みである。元來友人は一寸急造し得可き代物でない。まして蔦が松に絡み付きたる如く、我が半生の歴史と離る可らざる舊友の死は、我に取りては永久の損失である。取り返しの附かぬ、補填し難き缺陷である。

舊友宮島球川君は、我を棄て、逝いた。君は實に命を知り、天に任せ、泰然として往生を遂げた。今更ら愚癡を滾すは、君に對して、實に申譯けがない。されど予は君を喪うて吾心の淋しさを自覺せずして止む能はない。君と予とは四十有餘

舊友を喪うたる嘆



年の舊友だ。君の我が大江義塾に來り投じたのは、君が十四五歳の頃、予が二十歳前後であつたらう。當時君は白面瘦骨、沈黙せるひよろ長き一少年であつた。「呼號乗曉知誰子。滿袖風霜鬪竹刀」とは、予が當時の光景を詠じたるもの、君も亦た竹刀組の一人であつたと記憶する。

明治二十年東京に於て『國民之友』を創刊するや、君亦た勉學の餘、其の事務を手傳うたる一人であつた。當時民友社は、赤阪榎坂町にあり。短袴、高履の君等は、日本橋、神田、其他の下町から、雜誌代として、重き銅貨を、或は肩にし、受取り還つたことを記憶する。當時銅貨にて、販賣店が仕拂うたのは、それが割安であつた爲めであらう。

爾後君は或は上州に教育に従事し、熊本に新聞に従事し、更らに東京に出で、法律を學び、幾もなく宮島家を相續し、地方の一財産家の主人となり、それより各種の事業を計畫した。併し予は這般の事には、一切無頓著であつたから、別に君から、相談も受けず、消息をも詳にしなかつたが、其の結果に就て見れば、事志と違ひ、殆んど其の家産を蕩盡したかと察せらる。

斯くて君の記者生涯は、再び開始せられ、三十七八年役には、福岡日日新聞の軍事通信記者として、朝鮮、滿洲の間を馳驅した。爾來或は長野に、或は水戸に。而して更らに吾社に復歸して地方部長となり、大いに其職に協ひ、擢られて編輯局長となつた。

君や幹軀堂々、深沈寡黙、謾りに言笑せず。然も其の部員を遇する頗る厚く、思ひ遣ある好部長であつた。其の編輯局長となるや、言はずして化するの風あつ



た。君の吾社に在る、實に一個の重鎮であつた。當時君は職務の上から、又た興趣の上から、屢ば關東、東北地方を旅行した。予亦た君と相伴りて信州に遊び、又た奥羽に遊んだることがある。今にして之を思へば、一夢の如し。

大正九年の頃、君は臺灣新聞の副社長として赴くことになつた。予は苦ろに之を止めた。然も君は志一たび決すれば、何人の言をも容れない本性だ。曰く、必らず大なる獲物を携へて、再び先生と相見えんと。蓋し君は大いに期する所あつたに相違ない。然も時非にして、事は志と違ひ、昨秋不治の大患を抱いて東京に還つた。

君は如何なる場合にも、決して泣言を吐かない。自から不治の大患と知るや知らずや、人に對して平然、泰然、昂然、其の談ずる所は、時務にあらざれば、風雅

の事、曰く不日にして全癒せんのみと。予は君と相見る毎に、覺えず暗涙を呑んだ。而して其の末期に際し、家人に向て、死生必らずしも大事にあらず、決して悲嘆する勿れと、自から慰藉の言を遺し、泊然として眠るが如く逝いた。實に大正十五年三月廿三日の朝。享年五十九。予は危篤の報に接して、奔り赴いたが、既に及ばなかつた。然も其の面貌和平、安易、眞に従容として、生死の關を過ぎたる印象を留めてゐた。

君や壯にして狷介、や、圭角があつた。然も齡と與に寛裕、温厚の人となつた。資性慷慨にして義を好んだ。而して其の剛毅不屈にして、強情我慢、恰も九州男兒の眞骨頭ある者に庶幾かつた。君は要するに現代人ではなかつた。君が予の胸中に残したる缺陷は、到底予の一生と與に、その儘残るであらう。嗚呼哀夫。

(大正十五年三月二十八日)

舊友を喪うたる嘆



### 上村觀光君を弔ふ

上村觀光君の死は、實に我が同人を驚した。君の健康の近來甚だ勝れず、而して君の精神の稍々異常であるとは、同人の頗る心配したる所であつた。されど君が如き快活なる男子が、不自然の死を遂げんとは、我も人も全く意想外であつた。

新聞紙は君の死に就て、種々の報を傳へた。然も全く訛傳と云ふ能はずんば、恐らくは其の九分九厘迄は、訛傳と斷言するに憚らない。君は豪放の資で、且つ最近數年、事志と違ひ、其の處世置身の道に於て、多少の無理をしたに相違あるまい。されど君に於て、刑辟に觸るゝが如き行爲ありとは、到底我等同人には、信じ得らる可きものはない。但だ嚴重にも氣の毒であつたのは、君が自から長ず

る所を捨て、其の短なる所を擇んだことだ。

上村君は元來僧籍にして、哲學館の出身、曾て暹羅に遊び、高野山に教鞭を執り、爾來全く世間人となつた。而して君は明治、大正の時代に於て、確かに文運に貢獻したる一人だ。所謂五山文學なるものは、全く君一人の力にて、世に顯はれたとは云はない。されど君が其の最も重なる一人であつたことは、誰も争ふものはあるまい。

君が明治三十九年一月に出版したる『五山文學小史』の如きは、其名の如く、全く小史に相違なかりしも、實に五山文學の爲めに、道案内者となりたる、劃時代的の著作と云はねばならぬ。若夫れ五山文學全集、五山詩僧傳、禪林文藝史譚の如き、何れも君の五山文學に於ける、研究の效果にして、其他五山編年史の如き、



未だ全く脱稿に至らなかつたが、其の造詣の程度の、決して尋常一様ならざるを、  
證するに餘りあるものがある。

君の史眼は必らずしも濶遠とか、深透とか云ふ可きではなかつた。されど亦た決して脚元から鳥の立つ如き、近眼ではなかつた。君は必らずしも文章家ではなかつた。されど筆鋒犀利にして明快、暢達にして氣焔があつた。君にして若し専心一意、其の研究の本尊たる、五山文學に執著せしめば、君は必らず立派なる、文學博士の一員となつたであらう。否な君にして、若し官學に縁故あらしめたならば、文學博士の學位は、優に二十年前に附與せられたであらう。

されど君は其の五山文學の純忠臣たるには、餘りに霸氣が多過ぎた。學問と討死するには、餘りに世間的交渉が勝過ぎた。

君は多方面の人であつた。但だ予が君に就て知る所は、其の一面に過ぎない。然もその一面は、君に取りて、恐らく最も美なる一面であつた。君を予に紹介したのは、實に『五山文學小史』であつた。爾來二十餘年、予は實に學問上の益友として、君を待つた。苟も室町時代の文學に就て、疑義あれば、森君大狂に質さざれば、必らず君に質し、時としては双方に質した。所謂奇文偕に相ひ欽賞し、疑義與に相ひ解析した。

君の五山文學の造詣は、勢ひ五山刻刊の諸書に及んだ。而して更らに宋元の舊藁、藤原、鎌倉、足利の古鈔、其他苟も書籍、古文書、古書畫等に關する、君の嗜好は、八方に及んだ。君が身後迄、其の濡れ衣を被るの、餘儀なきに至つたのも、恐らくは此の嗜好が、其累を及ぼしたものであらう。但だ予は委しく之を語る程



には、其の消息に通じてゐない。

予と君とは其の性行、一として相同じきものなかつた。但だ其の愛書癖に於て、臭味を同うした。而して予は君の五山文學に於ける、學識を尊敬し、且つ君の快活にして、やゝ野人的なるを愛好し、苟も京阪に赴くや、必らず君と相見ざるを、年中行事の一とした。洛中洛外の名勝、殆んど君と相拉へて遊ばざるなし。宇治、石山、奈良は勿論、或は君と丹波千ヶ畑の法常寺に赴き、一絲和尚の墳墓を弔し。或は君と高野山に遊し、金剛三昧院に宿した。今にして君を亡ふ、獨り斯文の爲めに悲しむのみではない。

老來何必說鍾情。身世推移暗自驚。

無奈故人凋落去。新愁舊恨一時生。

(大正十五年七月二十日)

### 秋に先つ一葉

—福田和五郎君を懷ふ—

未だ秋に先つて一葉の散るを悲しむ。我が國民新聞とは、最も縁故の舊であつた福田和五郎君は逝いた、實に哀悼に禁へなす。

君は上州澤渡の産、湯淺治郎翁が群馬縣會の議長であつた頃、君は縣會の書記であつた。翁は君の能を認め、君を民友社に紹介した。此の如くして予と君の關係は開始せられた。此れは明治二十年、若しくは二十一年の頃と覺ゆ。而して君は民友社に在りて、國民之友の編輯に參し、傍ら小冊子の編纂に従事した。



當時予は日刊新聞を起すの志があつた。偶々京都の有志家伊東熊夫君等の京都日報を創立し、編輯者を要むるに際し、予は君を推薦した。此れは豫め他日の地を作す爲めであつた。

君の京都日報に於ける勉強は、評判物であつた。而して明治二十三年二月、國民新聞の創刊せらるゝや、其の第一號は實に君によりて編輯せられた。二號以下も勿論のことであつた。君は全く晝夜兼行で、精勵した。

當時國民新聞社には、多士濟々であつたが、然も新聞の編輯に經驗あるものとは、一人も無つた。予の如きも記者としては、明治十五年以來の歴史を持つてゐたが、編輯には、全くの素人であつた。されば福田君の國民新聞初期に於ける貢獻は、長く記憶し、長く感銘す可き理由がある。

福田君は元來民友社型の人物ではなかつた。云はゞ燕趙悲歌の士の風趣があつた。然も悲歌の士としての美點のみの所有者にして、必然それに伴隨す可き缺點としては、殆んど見出す可きものが無つた。此の意味に於て、君は志士の典型と云ふに庶幾かつた。

君が國民新聞社を去つて以來の行徑は、予は之を詳かにしない。されど我等は相互の間に、一脈の温情を湛へ、互に諒解する所があつた。乃ち其の趨舎は同からざるも、互に許す所はあつた。

君は容貌魁梧、滿面殆んど鬚をもて掩はれ、宛も北海道産の熊に接するの風采があつた。然も其の色温、其の言和、而して其の微笑するや、如何にも人を魅する



の愛相が溢れた。君は今人でなく、古人であつた。云はゞ君の同郷の志士高山正之の如きは、君の理想的先輩であつた乎、否乎を詳にしないが、然もそれに庶幾かつた。

(昭和二年八月三十日)

### 教養ある文士の死

―芥川君に就て―

七月廿五日、何か變事があるかの如く感せられ、國民史起稿中に拘らず、筆を擱して、早朝先著の新聞を見た。果然芥川龍之介氏の死を報じてゐる。然も自殺を。

予は君の作物の若干を讀んで、其の如何なる人である可き乎を知つてゐた。前年

三宅安子女史の爲めに催されたる會合の席にて、偶然予の隣に氏の席が設けられ、初て相見て相語るの機會を得た。

其次には本年文藝春秋社の催しにかゝる談話會に相見た。その時に君は其の近刊の『隨筆集、梅、馬、鷺』を携へ來つて贈つた。予はその答禮として、拙著『野史亭獨語』を郵送した所、君からそれに就て禮狀を寄せ來つた。

君は一見特色ある風采を具てゐた。何となく天才とは君が如き人ではあるまいかと思はしめた。君の文は眞率とか、自然とか、直截とか、素樸とか云ふ類ではない。

如何にも巧緻である。如何にも精鍊してゐる。一讀して教養ある紳士の文であることが判る。聞けば多作しないと云ふことであつたが、とても其の文章を讀めば、



多作せらる可き種類でない。名文と云はざる迄も、名人の作と云ふ可きものに庶幾い。先づ五日一水、十日一石の仲間であらう。

予は何故に君が死したる乎、何故に死せねばならぬ程に思ひ詰めた乎。それを揣摩する程、接近してゐないから、その邊の問題は、一切不問に附して置く。併し何處を見廻はしても、野蠻人の多き世の中に、君の如き文明人を見ることは、決して不愉快ではなかつた。

若し君にして存在せば、如何なる新たなる使命を、今後に果たす可き乎を審にしない。我等讀書子に取りては、此の教養ある壯年文士の死は、如何にも名残惜しくある。予は君の隨筆に就て、一言せんと期してゐた。されど今や君逝く、寧ろ黙するに若かず。

(昭和二年七月廿五日午前八時、大森山王草堂に於て)

### 瀧田 樗陰 君

瀧田君の永眠は久しき間の友人として如何にも残念に思ふ。實は私が、死んだならば、何か一と言位は君に『中央公論』で書いて貰ひたいと思つたが、それが逆様に私が君に就いて『中央公論』に追憶記を掲ぐるといふ事は、全く意外千萬の事である。然し世の中は意外から意外に轉じて行くもので、諦めるより仕方はあるまい。

私が瀧田君を知つたのは何時の頃かはつきり覚えて居ないが、まだ君が帝大の帽子を被つて青山草堂に往來した頃であつた。其時分から君は如何にも臆面なく



我が云ひたい事を無遠慮に云ふ人であつた。君の云ふ事にはさほど感心もしなかつたが、其率直にして坦易なる態度に感心して、私も心置きなく交際を續けて居た。其處で及ばずながら君の在學中は何かにつけて後援をしたのであつた。私は『中央公論』に匿名で種々の寄稿をしたが、それは悉く皆瀧田君の筆記して呉れたものであつた。私は『國民新聞』以外には自ら筆を執つた事は殆どなく、又力を入れた意見を他の雑誌に寄せた事も殆どないが、それでも『中央公論』は除外例であつた。それは社主の麻田君と友人であり、且つ瀧田君が筆記して呉れたからである。瀧田君の筆記は私に取つては安心であり、且つ満足であつた。

或る機會には瀧田君も新聞記者に成つて見たいと云ふ考もあり、それで麻田君との諒解をも得て、私は竊かに君を『國民新聞』の社會部長に推して居た。然し君は國民新聞に凡そ幾週間か勤務したやうであるが、如何にも其腰が落著かぬ様

子であつた。私も君は寧ろ雑誌記者を以つて成功すべき人と思ひ、其方に至心身を投せられん事を冀うた。『中央公論』が今日の地位を占むるに至つたのは、社主麻田君の經營宜しきを得たのは勿論、又随分難物である瀧田君をして自由の手腕を振はしめた爲めとは申しながら、瀧田君の功と勞とは十分識認すべき價值があると思ふ。

其時分私の青山草堂に水曜會を設け、水曜の夜相會して互ひに研究したる問題に就いて意見を交換した事があつた。其會員の一人は今京都大學に在る法學博士河田嗣郎君、一人は前文部參與官代議士河上哲太君、今一人は昨年まで國民新聞社の編輯局長であつた石川六郎君、それと瀧田君であつた。此會は當時私が新聞以外政治上に若干の關係があつて、多忙の爲め永續しなかつたが、今から思ふと面白き集りであつた。唯不思議に其夜は雨が降つたから、私の妻は日が水曜



であり、會員が孰れも水に縁ある方々であるから、雨の降るのも致方はあるまいと申して居た。

大正八年私は大病後逗子に閑居して専ら修史に従事して居たが、瀧田君が私の爲めに新聞記者の六十年間とか何とか云ふ可成長文を筆記して呉れました。それは大正十一年の冬であつた。瀧田君は此れが爲に鎌倉に泊り込み、毎日逗子に通うて來られた。其時君が鉛筆削りに用ひたる小さいナイフを遺して歸つたが、それが如何にも重寶であつたから、私がそれを其儘使用して居る。後に瀧田君に逢うて、あれは君が忘れて遺して置いたのであるが、其儘僕が頂戴すると云うて置いた。それは唯今も私の座右にあります。圖らずそれが瀧田君を偲ぶ一つの形見となつた。又十二年の暮には毛禮卿の事に就き君の筆記を煩はした。此時大森草堂は未だ出來上らず、毎朝成實堂の樓上にて君と相對してかれこれ五六日も

掛つた。其時君は大森の海岸に泊り込んで毎朝出掛けて來たが、其時分から君の身體は何となく平常でなかつたやうに思はれた。梯子を上るさへも何となく苦痛であつたやうに思はれた。

私が最後に瀧田君と面會したのは大正十四年七月十七日であつた。當日平福君と共に國民新聞社新築地鎮祭に臨んだが、平福君の語る所に據れば瀧田君は重症である、然るに一切醫者の云ふ事は聞き容れない。周圍の人も困り抜いて居るとのこと。私は取敢へず平福君と共に、其場から直ちに瀧田君の病床を見舞うたが、君は私共の顔を見るや、重病の患者とは思へぬ元氣にて種々の談話をなし、其愛藏の幅やら帖やらを取出し私共に示し、且つ私に題字とか畫贊とか種々注文をした。私は君の云ふ儘君の面前にて、汗をかきつつ之れに應じた。而して飽かぬ別れを惜しみつつ、尙ほ今一度位は面會の機會がある事を思ひ別れを



告げた。其時瀧田君は玄關迄見送つたが、私の櫻の皮で捲きたるステッキを見てそれは秋田産でせうと云うた。私は此は多分君の贈つて呉れたものであらうと答へた。後から聞けば瀧田君は此の訪問を非常に喜んださうだが、然し其時私の忠告した事を聞き容れたか否かは不明である。それから十月二十六日帝國ホテルで大谷光瑞師を中心に麻田君や其他と會食したが、其時瀧田君の話が出て、今年一杯は難しからうと醫師の云うたなどと云ふ事を聞いて、是非其内に今一度見舞ひたいと思うたが、其翌日大谷師と星ヶ岡茶寮で午餐に招かれた時に、師から瀧田君の計を聞き、歸つて國民新聞社に至れば麻田君から同様の通知を承り、それから取敢へず君を見舞うたが、其時は最早君が安らかに往生したる顔を見て、一炷の香を其前に焚くに止まつたのは、如何にも残り多き事であつた。

瀧田君が『中央公論』に功勞があり、又『中央公論』を通じて明治大正の文壇に

貢獻した事は、私が今此處に呶々するまでもあるまい。然し私個人に取つては瀧田君は益友であつた。それは私の如き世間と交際せず、殊に文藝界などとは殆ど没交渉である者には、瀧田君を通して種々の話を聞いたのである。私が瀧田君を見れば先づ第一に、近頃文界の消息は如何、新人物の發見は無きやなどと種々の質問をした。斷つて置くが私は悉く瀧田君の答ふる所を鵜呑にした譯ではない。然しそれによつて得る所が多かつたのであつた。

瀧田君が人に物を書かせる事の巧妙であつた事は、君を知る者の通論であらう。私なども君には種々書かされた。其内には平福畫伯などの帖もあつて、それに悪筆を振ふのは佛頭著糞の恐ありと辭退したが、それも聞き容れず其儘塗抹した事がある。此巧妙の手段は凡ゆる方面に行き、職務としては『中央公論』の爲めに働き、餘業としては君の書畫收藏を富饒ならしめたものであらう。



尚ほ終りに臨んで一言加へて置きたい。君が弘前の兵營に在つた際、種々の苦痛を訴へ、余に無心を申込んだ事實がある。其時余は情なくも金一圓を送り、それに之れは輕少であるが鹽煎餅を買へば百枚はある、それでも喫して兵營内の鬱を散じ給へと云うてやつた事を記憶して居る。これは聊か君に向つて諷する所があつたのであつた。然し後に聞けば君は例の巧妙なる手段を以つて軍醫などを籠絡し、思ふ所欲する所を恣にしたやうだ。君の一生は四十四歳、如何にも残り多いが、君としては殆ど此間思ふ所欲する所を恣にして、何等他に拘束せらるゝ所はなかつた。君は己れ自ら己れを拘束せず、況んや他人からをやだ。恐らくは心身二つながら君ほど自由の生活をした者は少いであらう。然し之れが又恐らくは君をして五十以内で此世を去らしむるに至つた所以であらう。何れにしても友人としての私には残り多き極みである。

(大正十四年十一月)

### 生眞面目な人

#### 内田魯庵君

齋藤君足下

昨日は態々山王草堂を訪問の上内田魯庵君に就いて、何か其の記念號に書く様にとの御注文、委細承知致しました。唯だ予の書かんと欲する問題は頗る多いが、書く可き事の少いのに當惑する。

予は魯庵君と別段親友と申す程の間柄では無かつた。併し其の面識は可成り昔の事。又た長くは無かつたが明治二十三年二月、『國民新聞』創刊以來、當分は几案を連らねて仕事をした事もあつた。爾來各々の行く道が違つたから、同じく東京に居

生眞面目な人



つゝ滅多に面會した事も無く、又た書翰の往復なども極めて稀れであつたが、互にと云へば魯庵君の予に於ける事も含むから、或は僭越かも知らぬが、兎も角も予の方からは、常に魯庵君の文筆の老て益々清健ならん事を祈つて已まなかつた。されば君の永眠の報に接して、三十餘年來未だ曾つて訪問した例が無い君の宅を訪ひ、君の柩の前に一瓣の香を焚いて、恭しく弔意を表した。

予が魯庵君に就いて感じた一端は、大正十四年八月の國民新聞に君の著書『思出す人々を讀む』と題したる文に掲げてある。それは『蕪峰叢書第四冊、好書品題』の中に採録してあるから、讀み度き人は讀んでいただき度い。その中に此くの如く云つて居る。

「魯庵君は、交友の天才と云ふ能はざる迄も、それに庶幾き人だ。されば其の交遊の間より得たる知識は、書籍より得たる知識と匹敵するものがある。乃ち眼

から得たものと、耳から得たものと、兩ながら君の驅使に供せられたれば、本書が我等に深甚の興味を唆るも、決して不思議はない。

且つ魯庵君は、話上手であり、其の文章には、一種の辛味があつて、或者にはそれが利き過ぎた憾あらんも、記者の如きは、この芥子とも、山葵とも、胡椒とも、山椒ともつかぬ内一種の辛味が、却つて痛快に感ぜらるゝ。但だこの辛味の、本書には餘りに濃厚ならざるは、著者が近頃老熟の致す所であらう。

序でながら記者と、魯庵君の關係を、此の機會に於て、一言したい。明治二十三年、『國民新聞』を發刊するに際し、記者が最初に著眼したるは、繪畫に於ける久保田米僊君と、文學評論に於ける内田不知庵君(今の魯庵君)であつた。頼ひに不知庵君を屈請し得たるも、遂ひに君の自由手腕を、揮はしむるを得るに至らしめなかつたのは、今尙ほ記者の遺憾とする所。

予は如何にして魯庵君を知りたる乎。それは當時巖本善治君によりて發行せられつ



つある『女學雜誌』紙上にて見出したのだ。『女學雜誌』は『國民之友』と共に云ふ可き乎、或は寧ろ其の以前にと云ふ可き乎、多くの人物を紹介してゐる。予は尠とも『女學雜誌』に由つて、石橋忍月、内田魯庵、山路愛山、北村透谷等の諸君を知ることを得た。

當時魯庵君は、不知庵の名を以つて縦横無礙に文藝的批評を試みた。それが予の注意を惹き、従つて『國民新聞』創立の時に、君を豫ねて予が目星をつけ置きたる交友の以外より、招聘したる第一人者とならしめた。併し君が『國民新聞』に來てからは、思うた程の働きを爲さなかつた。これは君の罪と云はんよりも、寧ろ當時國民新聞社中の雰圍氣が、君と全く合致しなかつた爲であらう。

君は創刊當初久保田米僊君と共に久保田君のスケッチにて『梅不見の記』と云ふ文を連日掲げたが、世間ではいざ知らず、社中には餘り評判が好くなかつた。何は兎もあれ、『國民新聞』の社中は孰れも概して田舎漢にて、君は生粹の江戸兒

であつた。國民新聞社中は、殆んで宗教的熱心を以て政治を見、政治的熱心を以つて宗教を見た。然るに君は我等の所謂政治や宗教には、左程の熱心は無く、謂はば常識ある文藝至上主義者であつた。吾々とても文藝に就いて全く無關心と云うでは無かつたが、君は何れかと云へば、元祿時代の文學—西鶴等を耽讀し、編輯局に、淡島寒月君より西鶴の『一代男』の原本等を借り來つて、世之介が遠目鏡にて女性の行水するのを二階から眺むる圖などを示し、それを得意としたるに、吾等の仲間には『斯る奇怪千萬の書物を編輯局などに振廻すとは何事ぞ』と、口には出さぬが心では思うた程であつたから、双方のそりが合はなかつたのは、餘儀もない次第であつたかも知れない。

けれども内田君は決して世の所謂文人流儀のづぼらでも無く、デカダンでも無かつた。他人にも几帳面である事を求めたが、自分は尙ほ更几帳面であつた。而



して社に居る間は、その言の行はるゝと行はれざるを問はず、その任務だけは盡した。君との間に幾何の書翰を往復したる乎、予はそれを記憶しない。されど頃ろ古き書翰を打込んだる筒を探したるに、左の一通が出で來つた。これが郵便消印を見れば、

『武藏東京 神田、二十三年五月卅一日ル便』とあり、その封筒には、

『京橋日吉町四番地

國民新聞社

徳富猪一郎様

至急直披

神田小川町五十八番地

大村家之助方

内田

貢

五月三十一日

とある。而してその中の文面は左の通りである。

『唯いま中西に参り候につき相談結局大に望ましけれど十五圓にては中々に衣食にもさし支へ候わけなれば一殊に森田に對してもと申す様なる次第、實際二十圓(朱點を附す)の御融通はつきかね候や及伺候。繰返して申す様なれど、中西は實に畏敬すべき男に候得ば若し出来る事なれば：シカシ出來ざれば致し方無之候につき小生の二十五圓を二十圓となし(朱點)その五圓を中西に與へて二十圓(朱點)と致して小生に於ては苦情なし然し世間には表面だけ三十圓(朱にて傍書)(朱點) 昨晚申上し通り御社の會計上にては朝三暮四のためし、損得なかるべし。右折入而懇願仕候。中西の役目もあらかた承知廣告も異議なし。幸田は多分十日以内に歸京致すべし。同人も日就社を退く事十中九分九厘請合申す。唯同人極て我意の張りたる男にて、時には絶筆など申す

生眞面目な人

三六五



事ことも有あれ之あり候さ得えば、早はや速すみと云いふわけには行いくまじけれど中ちゆう西せいと小せう生せいの力ちからよく動うごか  
し得えべしと信しんじ申まを候う(朱しゆ點てん)。

昨さく正しやう午ご出しゆつはつ篁くわう村そん、三まい味り兩らう人にん箱はこ根ねまで露ろ伴はん出で迎むかへ  
むべし。文ぶん界かい又またボリシおこなー行いはる、事こと驚おどろくに堪たへたり。

昨さく夕ゆふ御ご歸き宅たく後ごちゆう一いち寸すん用よう事じあつて市しちゆう中ちゆうへ出で掛かけ候まをあとに、森もり鷗おう外がい氏し訪おとづられ申まをし  
今朝こんてう手て紙かみ來きたり候まを。呵か々々。

右みぎ御ご返へん事じ早さつ速そく願ねがひ上あが候まを。草さう々々。

三十一日

徳富様

侍史

貢

此この書しよ翰かんは凡あら有ゆる意い味みに於おいて、内うち田だ君くんその人ひとの面めん目もくを躍やく如じよたらしめてゐる。此こに  
中なか西にしとあるは、中なか西にし梅ばい花かのこゝである。君きみは梅ばい花かを推す薦せんしたから、予よは十五ご圓えんの  
月げつ給きよにて如い何かと云いふたるに、それでは困こまるから、二十にじゅう圓えん融ゆう通つうして貫かんひ度たい。それ  
が出來できなければ自みづから社しゃより受う取けとる二十にじゅう五ご圓えんの中うちより、五ご圓えんを割わいて中なか西にしに與あへ  
てもよいとの事ことであつた。

此この手て紙がみに依よつて、當たう時じ内うち田だ魯ろ庵あん君くんが國こく民みん新しん聞ぶん社しゃより受う取けとる月げつ俸ほうが二十にじゅう五ご圓えんだつ  
た事ことが證しょう明めいせらるゝ。現げん今こん二十にじゅう五ご圓えんなど、云いふ月げつ俸ほうは、何なに處ところを探さがしてもある筈はずは  
無いが、明めい治ち二十にじゅう三さん年ねんには、今こん日にち十七じゅう億いっの豫よ算さんが未いだ一いっ億いっにも上のらず八はち千せん萬まん圓えんと  
か六ろく千せん萬まん圓えんとか政せい府ふと議ぎ會かいが折せつ衝しょうしてゐる時じ分ぶんであつた。されば二十にじゅう五ご圓えんの給きよ料りょう  
は、今こん日にちで云いへば二百にひゃく五ご十じゅう圓えんと云いふべきものであらう。先まづその位くらひの見けん當たうと見みて  
差さ支し無ないと思おもふ。予よが久く保ぼ田た米まい僊せん君くんに百ひゃく圓えんの名な義ぎにて、事じ實じつそれに庶ちか幾かさ月げつ俸ほうを



拂つたのは、當時に於ては可成り思切つたる奮發であつた。此くの如く君は吾社の爲にも計り、その友人の爲にも計り、その爲には自らを犠牲としてもかまはない程の心意氣の持主であつた。

話代る。其後予は何れかと云へば政治に没頭し、内田君は其の文名の世に高まると共に、愈々其の方面に向つて働きたつ、あつたから自然に疎遠になつた。予が未だ勝海舟先生の店子として、赤坂氷川町に居る頃であつたらう。雜客に妨げられて往々居留守を使つたのだ。然るに主人の命はよく徹底し、其爲に内田君までが其厄に罹つた。扱て狭き家であるから、いくら居留守を使つても主人在宅の事は平生大聲にて談話する癖あれば直に看破でなく、聽破されたのであらう。後にて聞けば内田君は頗る憤慨して歸へつたと云ふ事である。予も内田君であれば強ひて斷るわけもなく、却て笑止な事をしたと思つた。其後内田君が『大文學者』となる

の法』とか題する戯著の中に、其の一方方法として、居留守を使ふ事が特筆されてあつて、それが多分貴君の事に當嵌めたのであらうと注意して呉れた人があつたが、予は一笑して遂にその文を讀まずにしまつた。果して然る耶否耶は知らぬが、内田君はなか／＼生眞面目な人であつた。

君はよく友人は作つた様だが團體は作らなかつた。例へば當時に於ては、硯友社派、民友社派、文學界派、後には早稻田派、大學派、種々の流派もあつたが、内田君は頂天立地、一國一人で殆んど他に其類が無かつた。此くの如く君は文學上の團體にも加入せず、又た自ら團體も作らず、自分ともならず、親分ともならず、さりとて一己の仙人ともならず、文學界に於ける隱然一敵國として、多くの人から敬畏せられてゐた様だ。

予は丸善から時々出版する『學燈』なる雑誌に、内田君の隨筆の出てるのを愛讀した。當初はそれが内田君の作と云ふ事を知らなかつたが、讀みつゝある間に他



の垂示を俟たず内田君以外には、斯るものを書き得る者は無いと、自ら氣付いたのだ。

予の書室には、内田君の翻譯にかゝるトルストイの『復活』がある。これには左の書翰が添うてゐる。

『拙譯敢て貴覽を汚すに足らざれども、改編出版相成候につき、謹みて一本を座右に献じ候につき、御高教伏て奉冀上候也。』

明治四十三年三月三日

内田 貢

徳富猪一郎先生

追而貴編輯所へもあて一本贈呈致し置き候が、然るべく願上候也。』  
其後「思出す人々」に就いて左の書翰が添うてゐる。封筒には、

『京橋區日吉町』

國民新聞社

徳富猪一郎様

直披

大久保百人町三八四

内田 貢

とあり、その文は、

『拜啓、益々御清榮奉賀候。陳者拙著思出す人々實は舊著の補訂改編に候へども、久々敬意を表する爲め、一本書肆より座右へ捧呈爲致候間、若し高教を忝ふするを得ば、千萬光榮に存じ候。以上拜具。』

六月廿四日

内田 貢

蘇峰先生

侍史

生眞面目な人



これは大正十四年六月の二十四日、それに就いての批評が『國民新聞』に出たのが、大正十四年八月中旬頃であつた。

この批評に就いて何か君より挨拶の手紙が來てゐる様であつたが、今手許にそれを發見しない、其後予が『蘇峰隨筆』であらうと思ふが、それを贈つたに、左の如き返事が來た。

『封筒』

京橋區日吉町 民友社

徳富猪一郎様

直披

大久保百人町三八四

内田

貢

高著御惠贈、望外の寵貽、誠不堪感謝。所收高文の大部分は、拜讀後切披させて

秘襲致し居候が、その内或物は切披後亡佚して、深く憾居候なれば、拜披して恰も久濶の友に會の感あり。再讀三讀興味愈々深し、慾と云へば、書中所載の古書のフアクシミルを、切めて數葉なりとも入れて欲しかりしと望蜀に堪へず候。

先は不取敢御禮まで。

書餘その内拜芝の機會あるべしと存じ候。草々不一。

(大正十四年)十月十日

蘇峰先生

内田生

侍史

惟ふに右の所謂高著は君の『思出す人々』に對するの返禮の心持で、予が君に贈つたものであらう。

人間は年をとると、段々昔の友が戀しくなる。予は何れの日か魯庵君と膝を交へ、

生眞面目な人



去にし昔を共に語り度いと思つて居たのに、其望みも消え失せて、纔に終世の遺憾を、青山齋場に於ける、所謂友人葬に依つて償ふ事を得たのは、今更ら悔むも詮方はあるまい。

但だ君が如く一世の文士として家に在つては慈父であり貞夫であり、殆んど模範的人人であつたと云ふ事は、多くの徳川時代を飾る江戸の文人には、寧ろ稀らしき美談と云はねばなるまい。

(昭和四年七月十三日 民友社に於て)

### 活ける詩

#### 感傷一片

九條夫人武子の長逝は、知るも知らざるも苟も心ある者は、悲しみ傷まぬものはなす。

はなす。

大谷家の兄弟姉妹は、其の長兄光瑞師を首として、何れもそれぞれの性格の持主であると共に、非凡の人達である。そは英發なる其の父君明如上人の血を承けてゐるからであらう。明如上人をして、若し政治家たらしめたらば、恐らくは明治時代の好大臣であつたであらう。而して明如上人の愛子として、其の最後に生れ出でたる武子夫人は、女性であつた爲めに、殊更らに其の彩色が華麗に、其の才情が鮮美であつた。

大谷家は女性に恵まれたと同時に、又た其恵を奪はれた。大谷光瑞師の裏方であつた籌子夫人は、記者の知り得る限りに於ては、其の同時代、其の同年輩の巾幗中にての豪傑であつた。其の膽略に至りては、剛腸男子も、恐らくは辟易した程